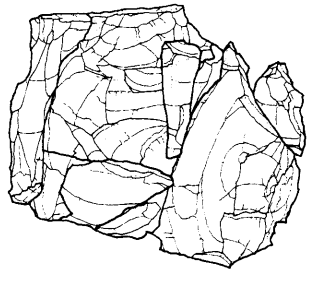
三重県埋蔵文化財調査報告１６０

山崎遺跡発掘調査報告

― 三重県度会郡度会町下久具 ―



１９９７．３

三重県埋蔵文化財センター

序

自動車輸送体系の発達した今日、道路網の整備は南北に長い県土を有する三重県にとって最重要課題のひとつとして挙げられましょう。

しかし、歴史や文化の足跡を知る上で重要な資料となる文化財の保護も行政に求められる役割として欠くことのできないものであります。

このような中で、道路整備の円滑と文化財保護との整合を図るため埋蔵文化財の保護については止むを得ず事前に発掘調査を実施し、その内容や実態について写真・図面等の記録による保存に留めているところであります。

今回報告させていただきます「山崎遺跡」もこのような埋蔵文化財のひとつで、度会町棚橋と対岸の下久具を結ぶ内城田大橋の付け替えに伴って発掘調査を実施したものであります。調査範囲は橋のたもとの拡幅部分に限られ、遺跡の全容を解明するには至っていませんが、旧石器時代から中世にまで及ぶ人々の足跡が新しく発見されました。特に旧石器時代の調査では多くの遺物に恵まれ、県内ではまだ少ないこの時代のまとまった資料と成果を得ることができました。これらは地域の歴史を知る上でその一助となるものと確信しております。

文末となりましたが、調査の実施に当たりご協力賜りました三重県土木部道路建設課、同伊勢土木事務所、度会町教育委員会、度会町建設課、管内文化財調査員各位並びに地元各位に感謝申し上げて刊行のご挨拶とさせていただきます。

平成９年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　　奥　村　敏　夫

例　　言

1　本書は三重県度会郡度会町下久具字山崎に所在する山崎（やまざき）遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡の調査は平成８年度県道度会玉城線橋梁整備事業に伴い、三重県教育委員会が三重県土木部から経費の執行委任を受けて実施した。

3　調査および整理は次の体制により実施した。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課

主事　松葉和也　　技師　西村美幸　　臨時技術補助員　山田康博

整理担当　　三重県埋蔵文化財センター　管理指導課

4　調査にあたっては、西守氏、地元川口・棚橋の方々をはじめ、三重県土木部道路建設課、伊勢土木事務所、度会町教育委員会、度会町建設課からの協力を得た。

5　本書作成にあたっては、谷口雅春氏（国学院大学）、奥義次氏（三重県立度会高等学校）、磯部克氏（三重県立松阪高等学校）、新田剛氏（鈴鹿市教育委員会）のご教示を得た。

6　本書の執筆・写真撮影および作成は松葉が行った。なお、図面作成等は管理指導課の協力を得た。

7　本書の方位は真北を用いた。なお、磁北方位は、西偏約６度20分（平成元年、国土地理院）である。

8　本書で用いた遺構表示略記号は以下による。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝

9　当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

10　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　　言 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 1
Ⅲ　調査の成果(1)～旧石器時代～ …… 4
Ⅳ　調査の成果(2)～縄文時代以降～ …… 15
Ⅴ　結語 …… 20

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　遺跡地形図 …… 3
第３図　調査区位置図 …… 3
第４図　三重県位置図 …… 3
第５図　下層調査遺物出土分布図 …… 5
第６図　石器集中部１・２遺物出土分布図 …… 7
第７図　石器実測図 …… 9
第８図　接合資料１実測図 …… 10
第９図　接合資料２実測図 …… 11
第10図　調査区平面図及び土層断面図 …… 16
第11図　遺構実測図 …… 17
第12図　遺物実測図(1) …… 19
第13図　遺物実測図(2) …… 20

表　目　次

第１表　各母岩の特徴 …… 8
第２表　下層調査ブロック別母岩識別 …… 8
第３表　下層調査ブロック別石器組成 …… 8
第４表　旧石器時代遺物観察表 …… 12
第５表　接合資料１観察表 …… 13
第６表　接合資料２観察表 …… 13
第７表　礫集中部礫属性 …… 14
第８表　標高別遺物数 …… 14

図　版　目　次

図版１　調査区遠景（南から） …… 21
　　上層遺構（北から） …… 21
図版２　下層遺物出土状況（南から） …… 22
　　下層遺物出土状況（北東から） …… 22
図版３　下層遺物出土状況 …… 23
　　下層調査作業風景（北から） …… 23
図版４　接合資料１ …… 24
　　接合資料１（剥片・石核） …… 24
図版５　接合資料２ …… 25
　　接合資料２（剥片） …… 25
　　旧石器時代の遺物 …… 25
図版６　縄文時代の土器 …… 26
　　縄文時代の石器 …… 26

Ⅰ　前　言

1　調査の契機

山崎遺跡は、平成８年度主要地方道度会玉城線橋梁整備事業に先立つ遺跡分布調査および試掘調査によって発見された遺跡である。従来、遺跡の存在は認知されていなかったが、周知の万野遺跡の東側にあたるこの場所が事業計画範囲内に及び、平成８年4月23日に試掘調査（第３図）を行った。試掘坑１～４を設定したが、試掘坑１および２で遺構と遺物を確認し、約600 ㎡を遺跡範囲内であると判断した。その後の県土木部との調整協議でも遺跡の保存は困難であるという結論に至り、本調査を行うことになった。

2　調査の経過

(1)調査日誌（抄）

9月　9日　調査区内の植木を移植する。

10日　表土掘削を始める。遺物はチャートフレイク・土師器・山茶椀。

11日　南から検出作業を開始する。東端に落ち込みを検出する。他にピットを検出する。

17日　土坑を検出する。

18日　ＳＫ４からエンドスクレイパー出土。

20日　ＳＫ10から縄文土器出土。

10月２日　土坑・落ち込み掘削。

16日　写真撮影、遺構実測。

21日　遺物中にナイフ形石器とみられるものがあるとの指摘。下層調査の必要がある。

22日　下層調査。テストピット６か所、トレンチ１本を設定する。

23日　テストピット５から石器剥片が多量に出土。

25日　テストピット５からは143 個、６からは34個の遺物が出土する。

28日　現地協議。85㎡について調査期間を延長する。

11月11日　作業再開。

12日　下層小地区設定。

14日　石器ブロックを２か所確認。

18日　遺物取り上げ後も串を残し、遺物の散布状況を確認する。

20日　石器ブロック写真撮影。

22日　掘削・取り上げを終了する。下層遺物の総数は900 点ほど。

25日　写真撮影。

26日　火山灰分析試料、C^{14}年代測定試料を採取。調査終了。

(2)調査参加者

今回の調査に参加したのは、地元の川口・棚橋の方々である。ここにお名前を記し、お礼申し上げる。

飯田辰雄、大久保勝、川村さつ子、久保和代、
久保田みわ、小嶋さつえ、小林政義、
小林美代子、堀之内エミ子、山本きみへ、
山本房子、　　（50音順、敬称略）

また、土地所有者の西守氏には様々な便宜を計らっていただき、調査を円滑に進めることができた。感謝いたします。

Ⅱ　位置と環境

三重と奈良の県境、台高山脈を源流に持つ宮川は全長約91㎞に及ぶ県内一の河川である[1]。本流は、大内山川・濁川・注連指川・一之瀬川等の支流を集め、ほぼ東流しつつ伊勢湾に注いでいる。

山崎遺跡（１）は支流の一之瀬川が合流する地点の宮川本流に張り出した段丘上に位置している。この場所の段丘面は、湧水による小さな谷に隔てられ、東に山崎遺跡、西に万野遺跡（２）がある。

[旧石器時代]

宮川流域は旧石器時代の遺跡が多く、県内の半数以上がこの地域に集中している[2]。その中でも大台町出張遺跡は県内有数の遺跡として知られる。1976年と翌年に行われた発掘調査では、ナイフ形石器をはじめとする２万点以上の遺物が出土しており、後期

旧石器時代末の当該地域における拠点的な遺跡であることがうかがえる。[3] また、1996年から翌年にかけて調査された多気町内垣外遺跡ではＡＴ層下に石器群と礫群が出土している。[4]

[縄文時代]

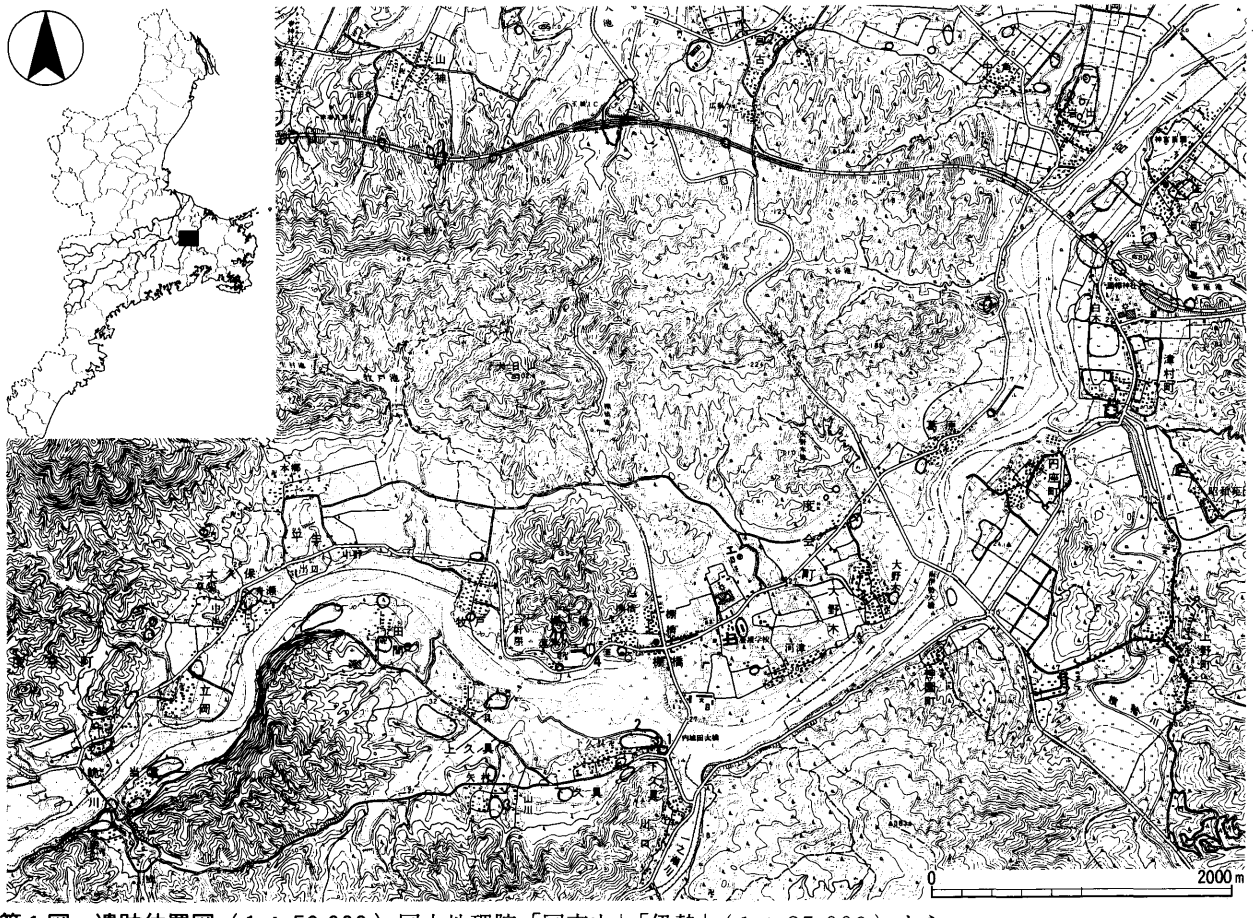
万野遺跡は縄文時代前期の大規模な遺跡で、多くの遺物が採集されている。[5] 県内の同時期の遺跡数は少ないが、その中でも代表的な遺跡である。中期から後期前半には前述の出張遺跡・万野遺跡をはじめ、同時期の遺構・遺物が確認されている遺跡は多い。後期後半には森添遺跡が知られる。この遺跡では朱が付着した土器も認められている。[6]

[古代以降]

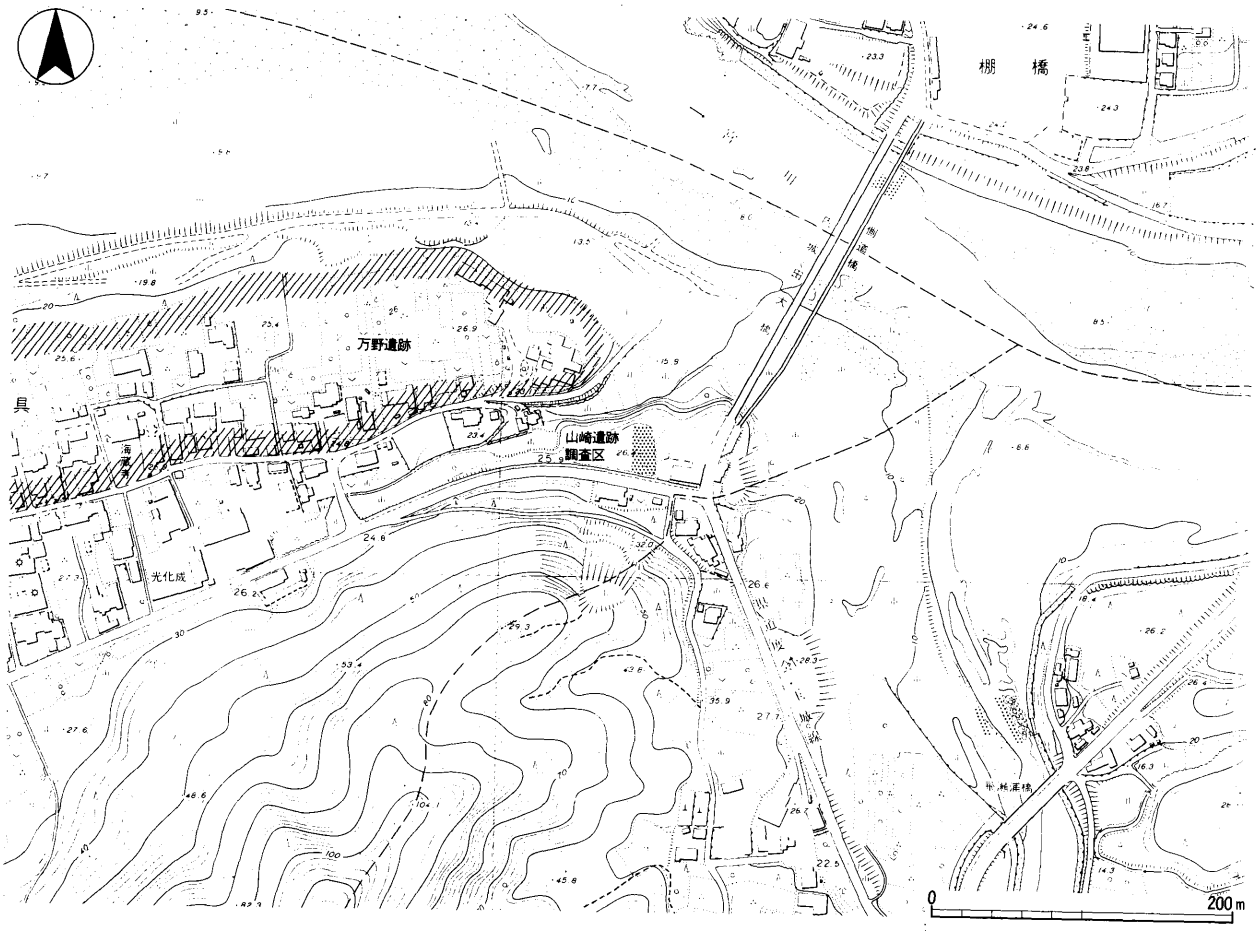
古代、度会郡・多気郡・飯野郡は神三郡として伊勢神宮の所領となっていた。棚橋の蓮花寺は10世紀末の創建とされ、この一帯に大橋御薗という寺領を持っていた。中世になると蓮花寺の勢力は増大し、多くの末寺・寺領を持つようになる。南北朝時代には北朝の拠点となり、伊勢に進出した北畠氏と衝突し、争奪の対象となっていった。築城時期は不明であるが、山川城（３）は宮川を隔てて蓮花寺と対称の位置にあり、興味深い。城山城（４）も蓮花寺に近く、何らかの関係を想起させる。中世の集落は川沿いの中位段丘上に点在し、現集落と重複していることも多い。[7]

[註]

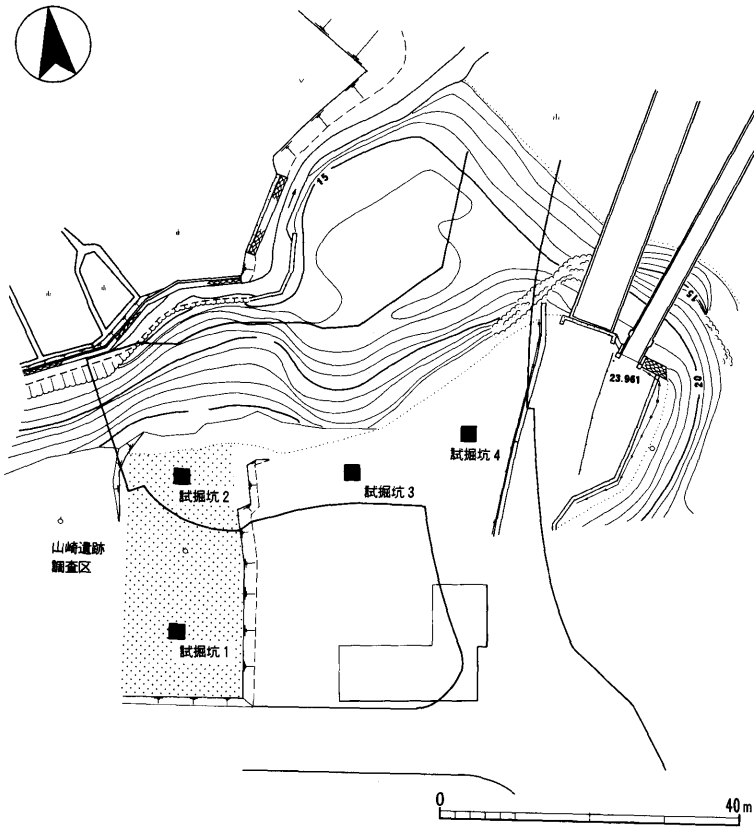
① 『宮川流域の自然と文化』（建設省三重工事事務所、1988年）。
② 奥義次「第二編通史　第一章原始」（『飯高町郷土誌』、1986年）。
③ 三ツ木貞夫他『出張遺跡調査報告書』（大台町出張遺跡調査会、1979年）。
④ 西出　孝『内垣外遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。
⑤ 岡田　登「下久具万野遺跡とその遺物」（『歩跡　第２号』、皇学館大学考古学研究会、1970年）。
⑥ 『第12回三重県埋蔵文化財展　三重の縄文時代』（三重県埋蔵文化財センター、1992年）。
⑦ 「第二編沿革　第四章古代・中世」（『度会町史』、1981年）。



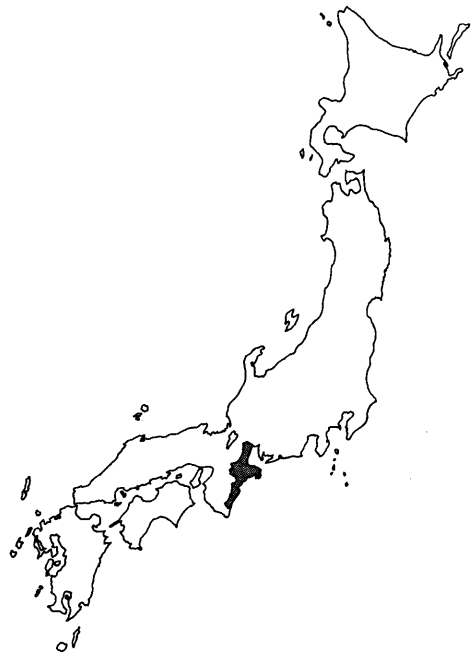
第１図　遺跡位置図（１：50,000）国土地理院「国束山」「伊勢」（１：25,000）から



第２図　遺跡地形図（１：5,000）



第３図　調査区位置図（１：1,000）



第４図　三重県位置図

Ⅲ　調査の成果(1)　～旧石器時代～

1　調査の方法

上層の遺構を検出・掘削した後に下層調査を行った。経緯は日誌（抄）に記載したとおりである。下層調査のテストピット（以下、ＴＰ）は、本格的な調査に備えて２ｍ四方に設定し、その間隔も後の設定が容易なように２の倍数にした。

下層調査は２ｍ四方のグリッドを設定し、掘削を行った。対象面積は88㎡である。グリッド番号は西から東へア～ウ、北から南へ１～８である。なお、アの列はア５以外は東西１ｍ、南北２ｍのグリッド設定である。掘削は少しずつ面的に行い、遺物が出土するごとに竹串を刺し、現位置を記録した。全ての遺物は、各グリッドの北西隅を基準にし、平面位置と海抜高を㎝単位で計測した。なお、ＴＰ５＝イ４、ＴＰ６＝イ８である。

2　層序

下層は基本的に４層に分けることができる。上位から、Ⅰ黄褐色土・Ⅱ灰黄褐色砂質土・Ⅲ淡褐色砂質土・Ⅳ灰色砂である。層間は漸移的であり、遺物出土時に層位を決定することができなかった。遺物出土の中心はⅡ層である。Ⅳ層以下は砂質土層の互層になっており、Ⅰ層上面から約２ｍで礫層に達する。全ての層で火山ガラス等は認められなかった。

3　遺構

遺構検出を試みながらそれぞれのグリッドを面的に掘削していったが、結果的に掘り込みを伴うような遺構は確認できなかった。しかし、剥片等の石器集中部が３か所、礫集中部が１か所認められ、これらを遺構としてここで記述する。

(1)石器・礫集中部

平面分布図では集中の度合いに差があるが、大きく３か所認められる。また、礫の比較的集中する部分についても１か所認められる。

①石器集中部１（ブロック１）

ア5・イ5グリッド境に集中するブロックである。石器類344点、礫19点で構成されており、ブロック２・３に比して高密度の出土である。長軸約3.5ｍ×短軸約3.0ｍの楕円形に収まる範囲を石器集中部とした。出土した標高は約70㎝の高低差をもっている。ブロック２との母岩の共有が認められ、また接合資料の存在から同時性が検証できる。

②石器集中部２（ブロック２）

イ４グリッドの北東隅を中心とし、環状に集中するブロックである。石器類404点、礫10点で構成されている。ブロック内でも極度に集中する部分と中心の空白部分が認められるが、大きく長軸約4.5ｍ×短軸約3.5ｍの楕円形に収まる範囲を石器集中部とした。出土した標高は約85㎝の高低差をもっている。

③石器集中部３（ブロック３）

イ８・ウ8グリッドに分布する。石器類44点で構成されるが、平面の状況から、その一部は調査区外に分布するものと思われる。長軸約2.5ｍ×短軸約2.0ｍの楕円形に収まる範囲を石器集中部とした。ブロック１・２に比して散漫な分布である。出土した標高は約75㎝の高低差をもっている。ブロック１・２との母岩の共有は認められない。

④礫集中部

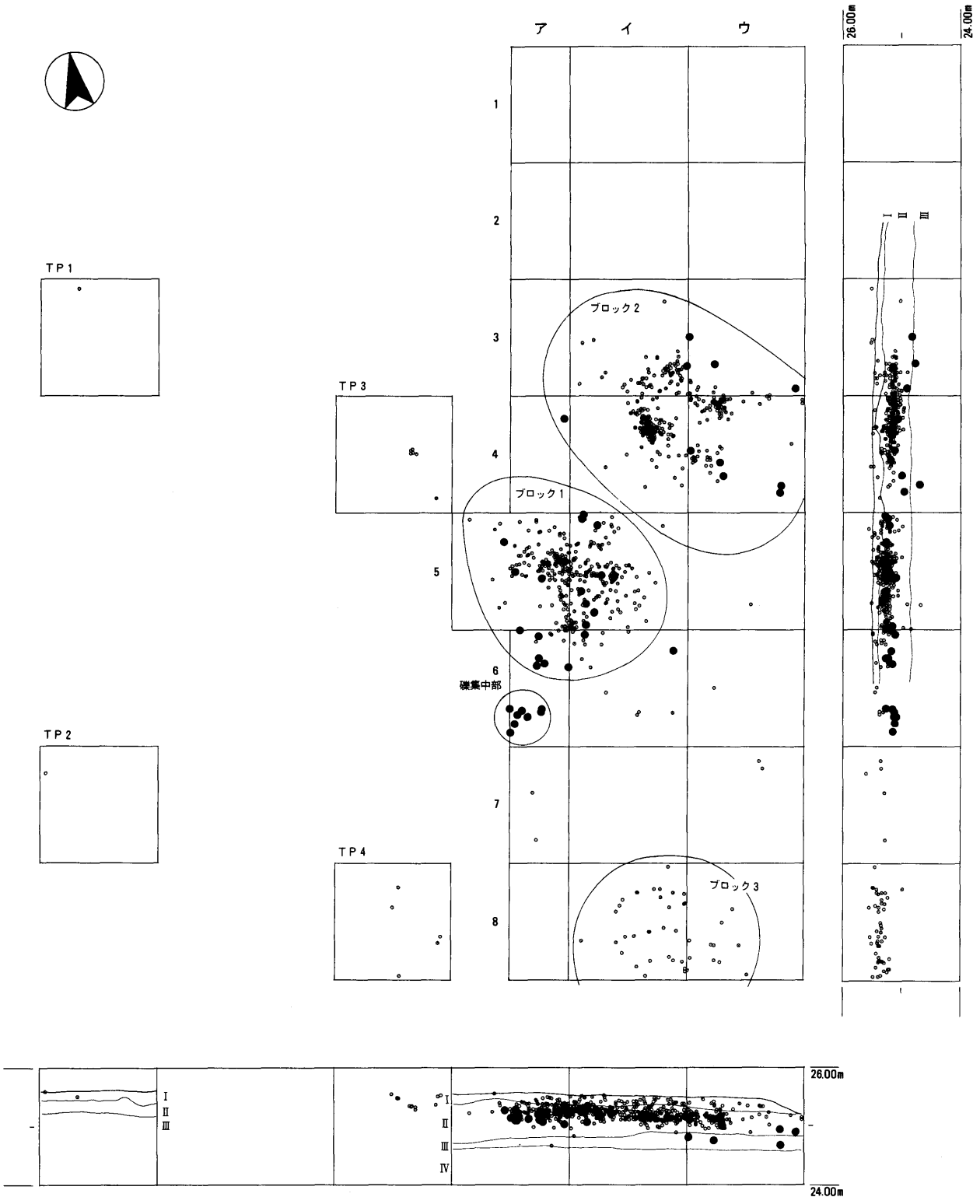
ア６グリッドの礫のうち、ブロック１に含まれない８点は独立した分布状況にあり、礫集中部とした。出土した標高は約15㎝の高低差をもっている。構成する礫の重量は100ｇ以下が６点、約500ｇと約650ｇが各１点であった。重量と標高には特に相関関係を見出すことはできない。この集中部は調査区端に接しており、範囲が拡大する可能性がある。

4　遺物

旧石器時代のものと思われる遺物は下層調査以外でも出土しており、ここではそれらを含めた遺物を図示して記述する。また、接合資料についても記述するが、母岩の識別は不可欠であるため、ここで述べることにする。

(1)石器

１・３・４はナイフ形石器である。１は長さ3.0



〈凡例〉　○：礫を除いた全ての石器・剥片類

●：礫

TP：下層調査試掘坑

＊調査区内での位置は第10図参照

0　2m

第5図　下層調査遺物出土分布図（1：100）

cm、幅1.0 cmほどの縦長剥片の打点側を基部とし、両側縁に基部調整を施したものである。刃部には使用によるものと思われる小剥離が認められる。石材はチャートである。2は長さ2.1cm、幅0.6cmの小型の縦長剥片の一側縁に急角度の二次加工を施すものである。二次加工は側縁の3/4ほどに達し、ナイフ形石器である可能性もある。石材はチャートである。3は長さ5.0cm以上、幅3.0cmほどの比較的大型のチャートの縦長剥片を素材とする。打点側を基部とし両側縁に基部調整を施すが、先端部を欠損しており、右側縁の調整の範囲は不明である。背面には主要剥離面と反対方向の剥片剥離の痕が認められ、両設打面の石核から剥離されたものであろう。4は長さ9.1cm、幅2.7cmの大型の縦長剥片を素材とする。打点側を基部としている。石材は砂岩で、風化も激しいが両側縁の基部に調整が認められる。5は長さ3.9cm以上、幅3.0cmほどの薄い縦長剥片を素材とするサイドスクレイパーである。欠損のため右側縁は不明であるが、左側縁のほとんどに二次加工が施される。石材はチャートである。6は対照的に甲高の縦長剥片を素材とする。端部のみに二次加工を施すエンドスクレイパーである。側縁には使用による小剥離が認められる。チャート製である。7は両面加工の尖頭器の基部である。石材はチャートである。8は小型のチャートの縦長剥片である。先端部に使用によると思われる小剥離が認められる。9も同様に小型の縦長剥片の先端部に1、2回の二次加工が認められるものである。チャート製である。10は先端を欠損する縦長剥片である。右側縁に1、2回の二次加工が認められる。チャート製である。11は長さ6.2cm、幅2.8cmと比較的大型の縦長剥片である。側縁に使用痕の様なものも認められる。腹面には反対方向の剥片剥離が認められ、両設打面の石核から剥離されたものであろう。石材は砂岩である。12は石核である。石材はチャートで、後述する母岩識別のチャートbに相当する。小型の剥片が剥離されたようであるが、剥離方向は一定しない。13は後述の接合資料1の石核である。

(2)母岩の識別

石器集中部の石器素材は母岩の識別が可能なものがある。石器集中部の母岩の共有関係からその同時性を検討する目的で母岩識別を行った。

下層調査の石器素材はそのほとんどがチャートである。このチャートのうち、肉眼識別が比較的容易な4種類についてa～dとして分類した。識別は色調・模様・光沢・粒の粗密・自然面の特徴などを手掛かりに行っている。

①母岩a（チャートa）

色調は灰色で、半透明や黒色の斑状の不純物が多い。光沢は弱く、粒子は粗い。剥片類の総数は524点で、最も多い。主にイ3・イ4・ウ4とア5の各グリッドに集中して分布する。

②母岩b（チャートb）

黒色を呈し、節理による縞模様が目立つ。光沢はチャートaに比して強く、粒子も細かい。自然面は灰色で縞模様が目立つ。剥片類の総数は35点である。主にア5・イ5グリッドに分布する。

③母岩c（チャートc）

色調は黒緑色を呈し、節理が発達している。光沢の強さや粒子の大きさはチャートbと同程度である。節理による割れ面が風化した褐色の面と、風化した灰色の自然面がある。剥片類の総数は171点である。主にア5・イ5グリッドに分布する。

④母岩d（チャートd）

色調は灰黒色で、節理は他に比して少ない。光沢は弱いが、粒子が粗い感じはない。剥片類の総数は21点である。主にイ8・ウ8グリッドに分布する。

(3)接合資料

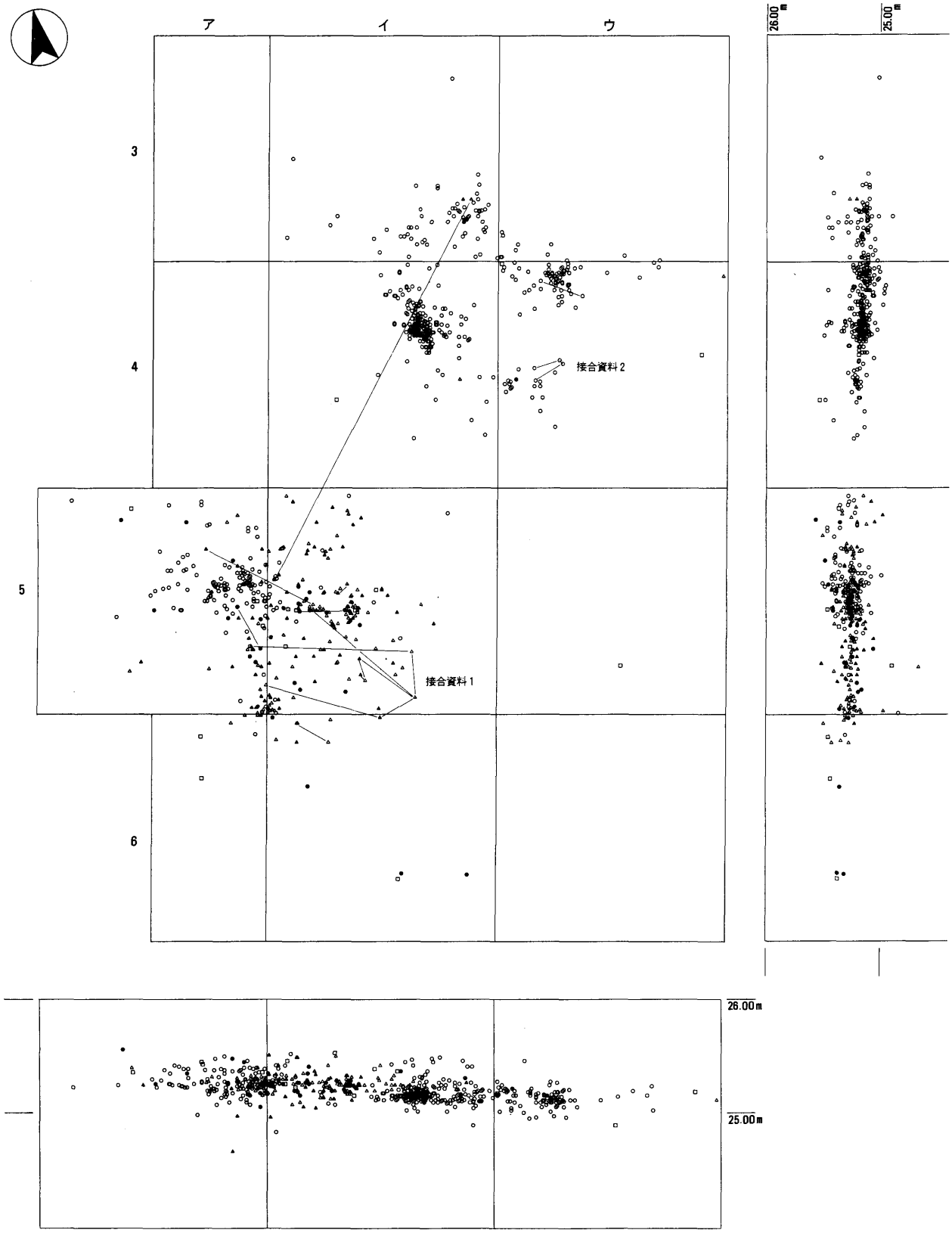
下層調査による出土剥片のうち、接合資料を11例確認している。接合作業は1997年1月の時点で中断しており、今後さらに接合例が増加する余地を残している。ここでは9点と4点の接合例を図示して記述する。折損関係の接合、微小な剥離関係の接合が多い他の9例は割愛した。

①接合資料1（9点接合例・報告No.14）

母岩はチャートcである。チャートcの剥片は171点あり、接合の余地を残している。ア5・イ5グリッドを中心に分布する。石器集中部1の中での接合関係である。

接合の結果、6.0cm×5.3cm×5.2cmほどの川原石と思われる礫を母岩としていることがわかる。

では、接合し得た範囲において復元される剥片剥



〈凡例〉 ○：チャートa　△：チャートc
⊕：チャートb　□：その他のチャート

0　2m

第6図　石器集中部1・2　遺物出土分布図　（1：50）

第1表　各母岩の特徴

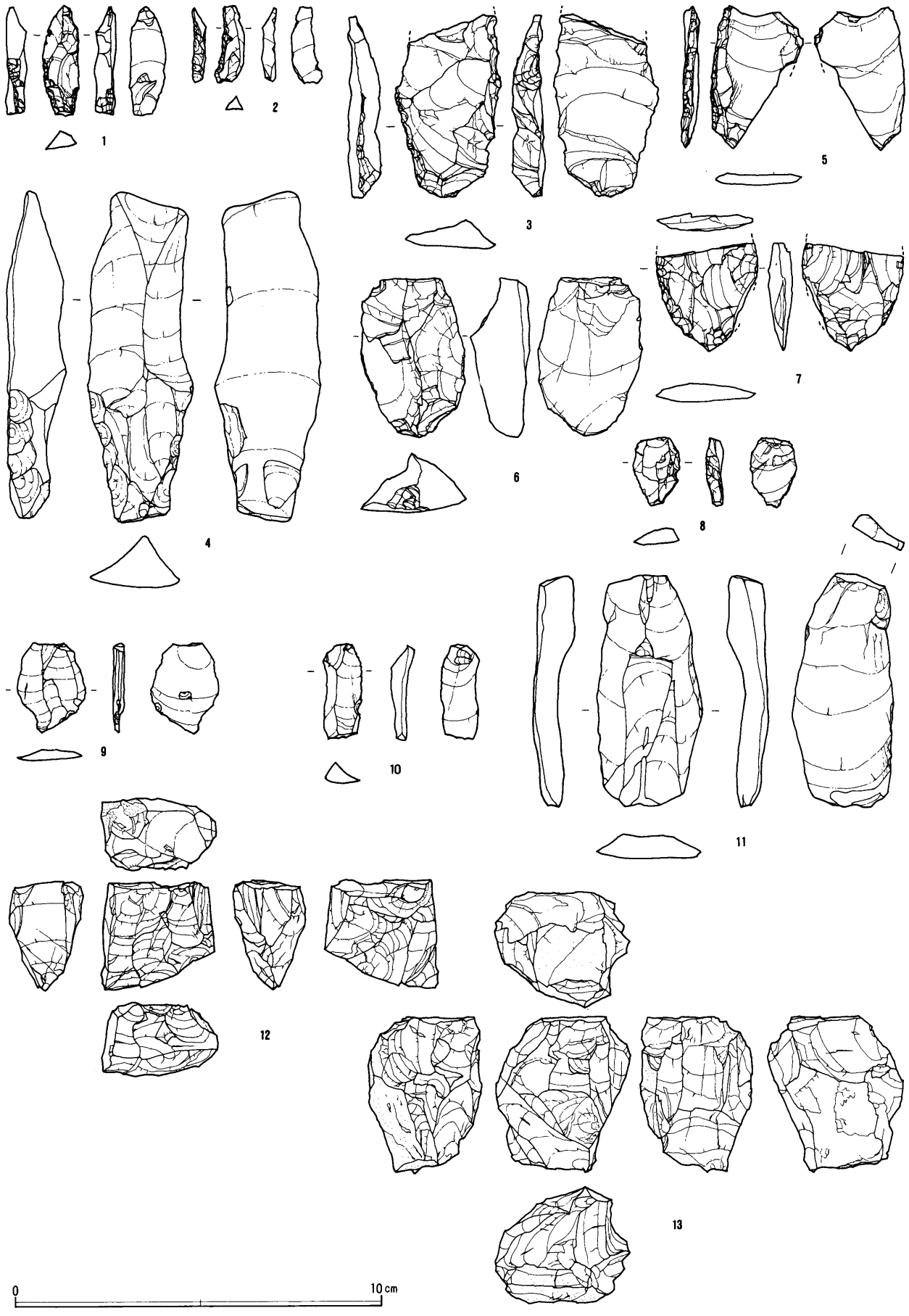
母岩名	色　調	粒	光沢	特　　徴	自然面の特徴
チャートa	灰　色	中	弱	半透明、黒色の斑点状の模様	灰色
チャートb	黒　色	密	中	白色の縞模様	灰色で縞模様が多い
チャートc	黒緑色	密	中	暗褐色の筋状の模様	灰色でなめらか
チャートd	灰黒色	密	弱	半透明の部分が多い	細かい割れ、灰色

第2表　下層調査ブロック別母岩識別　（数値は点数）

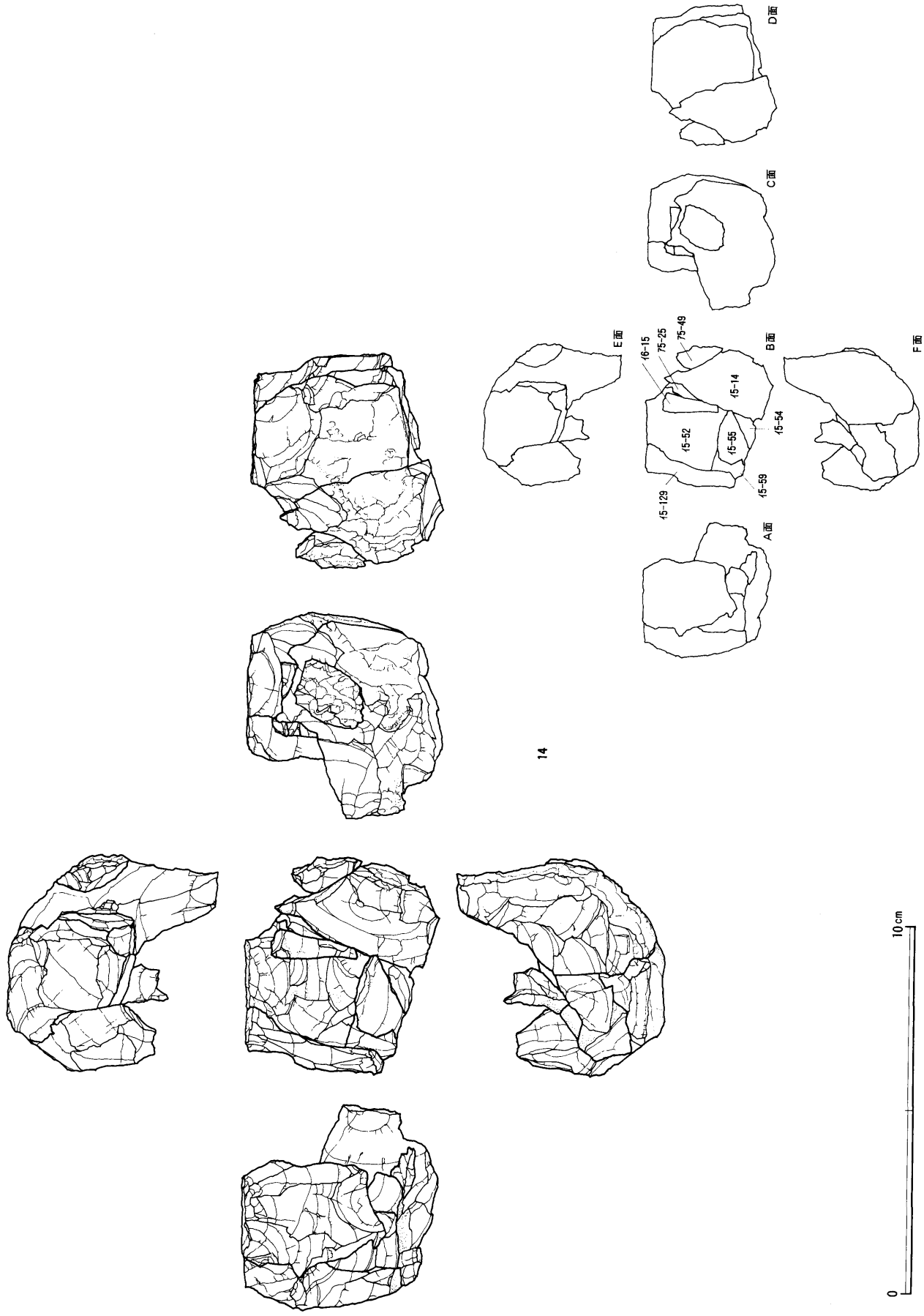
	チャートa	チャートb	チャートc	チャートd	チャート他	その他	計
ブロック1	133	32	167	−	10	2	344
ブロック2	391	1	4	−	4	4	404
ブロック3	−	−	−	21	20	3	44
合　計	524	33	171	21	34	9	792

第3表　下層調査ブロック別石器組成　（数値は点数）

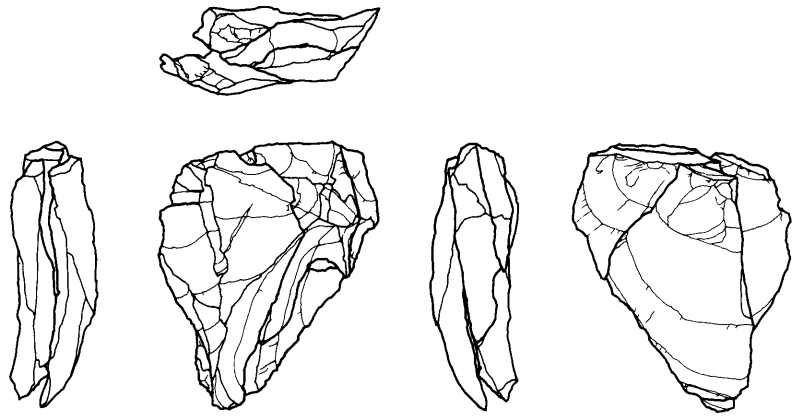
	ナイフ形石器	尖頭器	石　核	剥片類	礫	その他	計
ブロック1	−	1	3	340	19	1	364
ブロック2	1	−	7	396	10	2	416
ブロック3	−	−	−	44	−	−	44
礫集中部	−	−	−	−	8	−	8
ブロック外	−	−	−	23	1	−	24
合　計	1	1	10	803	38	3	856



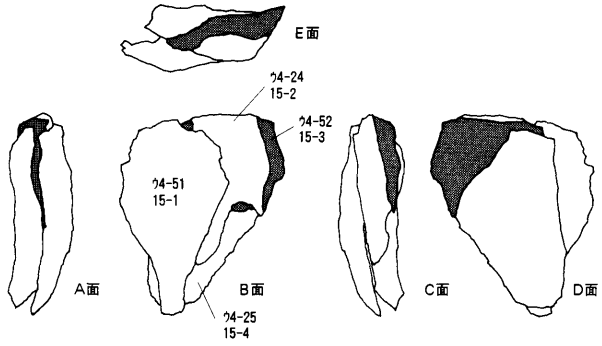
第７図　石器実測図（２：３）

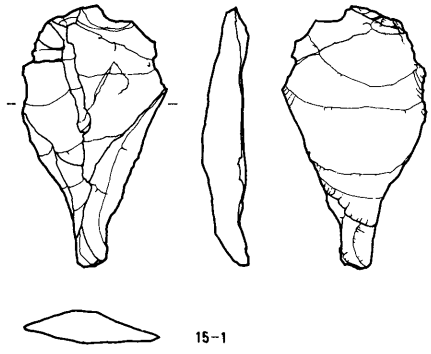


第8図　接合資料1実測図（2：3）

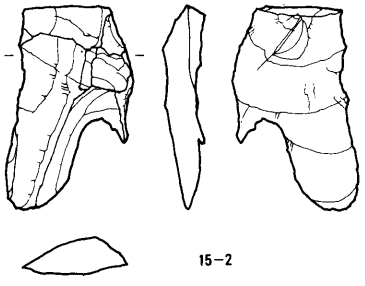


15

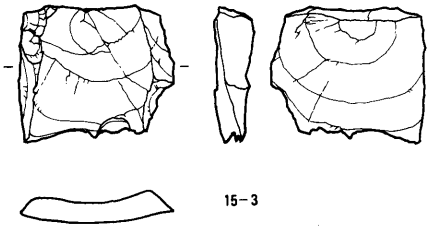




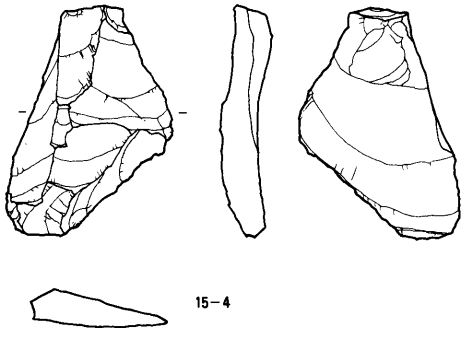
15-1



15-2



15-3



15-4

0　　10cm

第９図　接合資料２実測図（２：３）

離工程について述べていく。

まず、C面で背面に自然面を残す剥片（整理No.ア5−49）が剥離される。自然面除去に伴う剥片の接合はこの1点である。C面はほとんど自然面除去が行われない。次の作業は剥片（イ5−14）の剥離である。B面側からの剥離で、背面に大きく自然面を残し、厚みが2.5cmほどの分厚い剥片となっている。途中で節理の影響を受けた不定形の剥片である。その後、90°の打面転移が行われる。E面側からの打撃で横長の剥片（ア5−25）が剥離される。次に剥片（イ6−15）が剥離される。剥離面の幅0.8cmに対し長さ2.4cmと、縦長の剥片である。背面の稜線は1本で、片側は節理による剥離面となっている。角を狙って甲高の縦長剥片を獲得しようとした意図があるのかもしれない。この剥片は一側縁に二次加工、あるいは使用による小剥離が認められ、一定以上の機能を果たした剥片であると考えられる。その直後、寸詰まりで幅広の縦長剥片が作出されていると考えられるが、接合作業では見つけることができなかった。調査区外への持ち出しの可能性も考えられる。

A面側では比較的うまく自然面除去が行われたのであろう。数回の剥片剥離が行われた後、剥片（イ5−129）が剥離されたと思われる。平滑な自然面、あるいは風化した節理面であるE面側を打面とする剥片である。先端は腹面側からの折り取り、あるいは打撃により欠損している。

その後、180°の打面転移が行われている。自然面、あるいは風化した節理面を打面とし、剥片（イ5−54）と剥片（イ5−55）が連続して剥離されるが、いずれも不定形な剥片である。次に剥片（イ5−59）が剥離されるが、節理の影響を受けた不定形な剥片である。

残核（イ5−52・報告No.13）はE・F面に節理による剥離面が風化した面を残し、D面にも自然面を残している。大きさは4.3cm×3.7cm×3.1cmで55.72gである。石材には発達した節理が認められ、剥片剥離作業に影響を及ぼしている。打面を固定して定型的な剥片を作出するという傾向は見られない。比較的良質の部分を求めて打面を転移していった結果であろう。

②接合資料2（4点接合例・報告No.15）

母岩はチャートaで、石器集中部2の中での接合関係である。チャートaは524点と最も多いが、接合例は折損関係の1例を含めて2例である。接合の余地は多く残っていると考えられる。

接合資料2は少なくとも5枚連続で縦長の剥片を獲得しようとした例であろう。まず、剥片（整理No.ウ4−51・報告No.15−1）が剥離される。長さ5.27cm、幅2.98cmで先細りの剥片である。次は打点を左に1cmほど移動させて同一方向に剥片剥離を行っていると思われるが、接合作業では見つけることができなかった。次の剥片（ウ4−24・15−2）は打点を右に3cmほど移動させて同一方向に剥離したものである。長さ4.03cm、幅2.51cmの剥片であるが不定形な剥片となっている。続いて打点をほとんど左右に移動させることなく稜間をねらって剥片剥離を行っている。その結果、背面の稜線が2本の剥片（ウ4−52・15−3）が剥離されている。長さ2.71cm、幅3.12cmの寸詰まりで幅広の剥片である。図示していないが、チャートbを母岩とする接合例中にも同様の剥片が認められる。続いて打点を左に1.5cmほど移動して小さな縦長の剥片を剥離した後、打点の移動を行わずに剥片（ウ4−25・15−4）を剥離している。長さ4.6cm、幅3.2cmの不定形な剥片である。4点の剥片には顕著な二次加工痕や、使用痕は観察できない。いずれも定型的な縦長剥片となっておらず、石器製作を断念したのであろう。

第4表　旧石器時代遺物観察表

報告No.	グリッド・遺構	整理No.	実測No.	西→東(m)	北→南(m)	標高(m)	器種	石材・母岩	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	ウ4	104	005−01	0.03	0.02	25.18	ナイフ形石器	チャート	2.99	1.00	0.55	1.61	
2	イ4	40	006−01	1.59	0.45	25.09	RF	チャート・a	2.10	0.60	0.40	0.74	

3	表土	−	007 −01	−	−	−	ナイフ形石器	チャート	5.05	2.89	0.90	11.07	
4	SK8	−	008 −01	−	−	−	ナイフ形石器	砂岩	9.10	2.70	1.60	35.41	
5	D9検出	−	009 −01	−	−	−	スクレイパー	チャート	3.90	2.59	0.30	3.35	
6	SK4	−	010 −01	−	−	−	ｴﾝﾄﾞｽｸﾚｲﾊﾟｰ	チャート	4.45	2.80	1.60	15.56	
7	ア5	14	011 −01	1.70	0.64	25.48	尖頭器	チャート・b	2.94	2.76	0.60	4.82	
8	SK10	−	012 −01	−	−	−	ＲＦ	チャート	1.90	1.30	0.40	1.07	
9	ア5	66	006 −02	1.65	1.07	25.17	ＲＦ	チャート・a	2.50	1.80	0.32	1.70	
10	SK10	−	013 −01	−	−	−	ＲＦ	チャート	2.63	1.05	0.60	1.34	
11	E5検出	−	014 −01	−	−	−	石刃	砂岩	6.20	2.80	1.00	16.93	
12	イ5	133	015 −02	0.14	1.06	25.26	石核	チャート・b	3.00	3.10	2.00	20.37	
13	イ5	52	015 −01	1.29	1.85	25.28	石核	チャート・c	4.30	3.75	3.20	55.70	

第５表　接合資料１観察表

報告No.	グリッド	整理No.	実測No.	西→東(m)	北→南(m)	標　高(m)	器　　種	石材・母岩	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚　さ(cm)	重　量(g)	備　　考
14	ア５	49	016 −01	1.86	1.40	25.33	剥片	チャート・c	2.20	1.38	0.90	2.55	
14	イ５	14	016 −01	1.26	1.45	25.25	剥片	チャート・c	5.51	4.59	2.51	53.22	
14	ア５	25	016 −01	1.99	1.74	25.27	剥片	チャート・c	1.35	2.14	0.52	1.31	
14	イ６	15	016 −01	0.99	0.03	25.29	ＵＦ	チャート・c	2.37	0.90	0.75	1.21	小剥離が認められる
14	イ５	129	016 −01	0.40	1.07	25.27	剥片	チャート・c	4.00	3.30	1.20	11.01	
14	イ５	54	016 −01	0.82	1.65	25.25	剥片	チャート・c	1.62	1.41	0.49	0.76	
14	イ５	55	016 −01	0.86	1.70	25.25	剥片	チャート・c	1.45	2.37	0.74	2.65	
14	イ５	59	016 −01	0.81	1.51	25.26	剥片	チャート・c	3.31	3.25	1.51	9.08	
13	イ５	52	015 −01	1.29	1.85	25.28	石核	チャート・c	4.30	3.75	3.20	55.70	

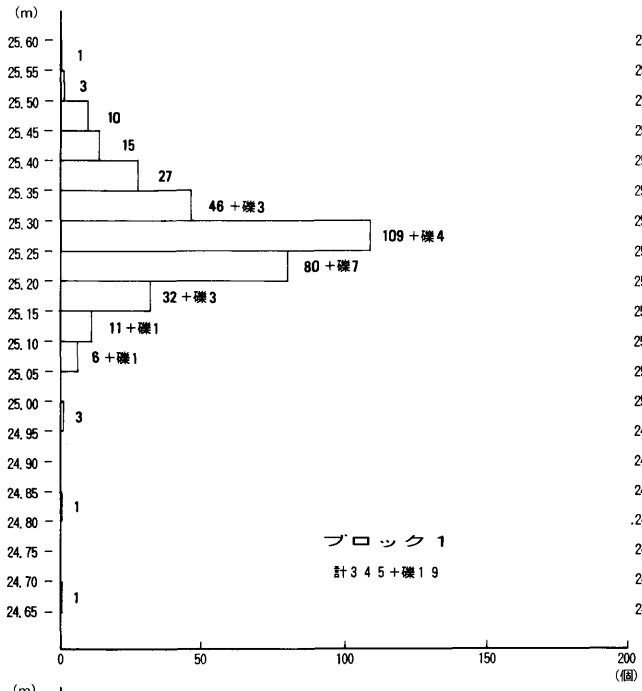
第６表　接合資料２観察表

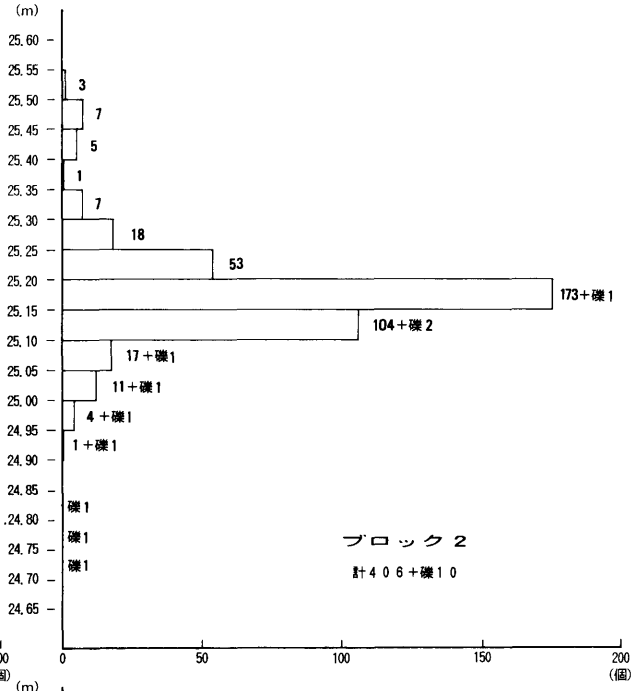
報告No.	グリッド	整理No.	実測No.	西→東(m)	北→南(m)	標　高(m)	器　　種	石材・母岩	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚　さ(cm)	重　量(g)	備　　考
15-1	ウ４	51	018 −01	0.32	0.94	25.18	剥片	チャート・a	5.27	2.98	0.61	8.60	
15-2	ウ４	24	019 −01	0.54	0.87	25.19	剥片	チャート・a	4.03	2.51	0.75	6.10	
15-3	ウ４	52	019 −02	0.57	0.90	25.15	剥片	チャート・a	2.71	3.12	0.53	4.90	
15-4	ウ４	25	018 −02	0.33	1.05	25.22	剥片	チャート・a	4.60	3.20	0.66	8.50	

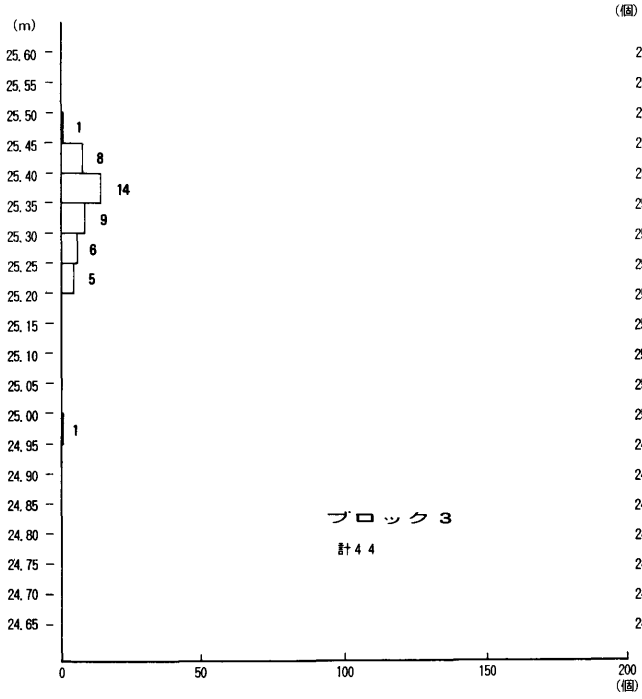
凡例）
ＲＦ：二次加工の有る剥片
ＵＦ：使用痕の有る剥片

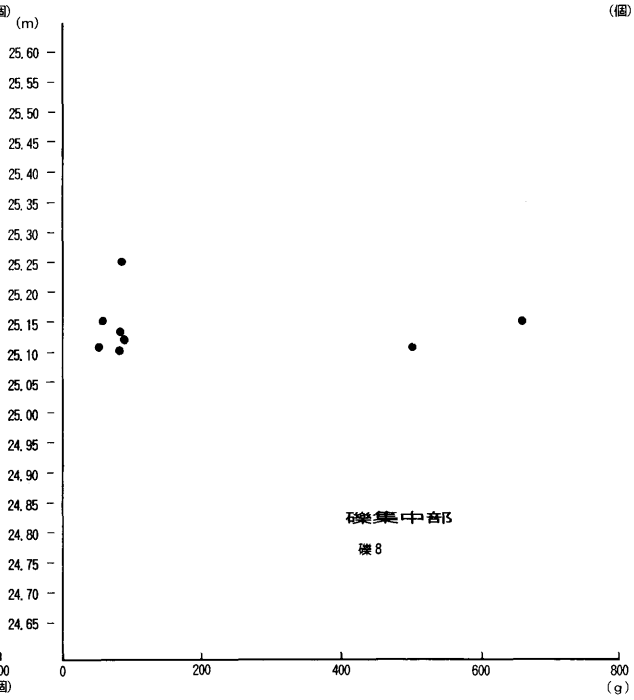
第7表　礫集中部礫属性

グリッド	整理No.	西→東(m)	北→南(m)	標高(m)	形態	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
ア6	10	1.08	1.60	25.11	亜角礫	砂岩	8.5	8.4	4.7	495	
ア6	11	1.30	1.48	25.13	円礫	砂岩	5.1	3.9	3.1	85	
ア6	12	1.00	1.75	25.15	円礫	チャート	5.2	4.3	2.4	58	割れ
ア6	13	1.52	1.35	25.25	円礫	チャート	6.5	4.7	2.9	85	
ア6	14	1.19	1.40	25.12	円礫	チャート	7.6	3.7	2.5	86	
ア6	15	1.52	1.40	25.11	亜角礫	千枚岩	6.0	3.0	1.8	53	
ア6	16	1.13	1.43	25.10	亜角礫	花崗岩	5.2	4.7	2.9	80	
ア6	18	1.00	1.35	25.15	亜角礫	砂岩	14.5	8.8	5.5	650	









第8表　標高別遺物数

Ⅳ　調査の成果(2) ～縄文時代以降～

1　調査の方法

上層では４ｍ四方の小地区を設定した。小地区番号は西から東へｂ～ｆ、北から南へ２～10である。

表土掘削は重機で行い、包含層で遺物が出土してきた時点で人力に切り換えた。しかし、包含層上部の遺物はそれほど認められなかったため、検出面上数cmまで下げることになった。

2　層序

本遺跡の現状は雑木林となっており、その土層は木の根による攪乱を受けている。基本層序は上位から、Ⅰ暗褐色腐食土、Ⅱ黄褐色粘質土、Ⅲ褐色腐食土、Ⅳ褐色土、Ⅴ暗褐色土、Ⅵ黄褐色粘質土である。Ⅰ・Ⅱ層は新しい表土と客土である。Ⅲ層は旧表土、Ⅳ・Ⅴ層が包含層である。Ⅵ層上面を検出面とした。なお、Ⅵ層は下層調査のⅠ層と同一のものである。

3　遺構

(1)縄文時代

縄文時代の遺構には土坑がある。調査時において遺構番号を付けた土坑は11基あるが、そのうちの５基は縄文時代のものと思われる。出土した土器は少量で小片が多く、時期の決め手に欠ける。また、遺構の性格についても不明である。

ＳＫ４（第11図）　調査区の東よりに位置する。平面形は長軸0.7ｍ、短軸 0.4ｍの不定形で、検出面からの深さは0.5ｍである。縄文土器小片と、石器剥片が出土している。また、縦長剥片を素材にしたスクレイパーが出土しているが紛れ込み遺物と考えている。

ＳＫ６（第11図）　調査区の東よりに位置する。落ち込みにより攪乱を受けている。確認した平面形は長軸約 2.3m、短軸約 1.5mの形の崩れた楕円形で、検出面からの深さは約 0.7mである。縄文土器小片と、石鏃、石器剥片が出土している。

ＳＫ８（第11図）　調査区の東よりに位置する。平面形は長軸 1.6m、短軸 1.5mの楕円形で、検出面からの深さは0.4mである。前期のものと思われる土器小片、中期末のものと思われる土器小片が出土している。他に石器剥片が出土している。

ＳＫ10（第11図）　調査区の北よりに位置する。検出面が北方向に傾斜しており、緩斜面上にあることになる。平面形は不定形だが、本来は楕円形に近いものだったかもしれない。長軸約3.6ｍ、短軸約2.4ｍで、検出面からの深さは約1.0ｍである。なお、中央には直径約20cm、深さ約15cmの小穴がある。その点では陥し穴にも似るが、壁の角度は緩く、否定的に考えている。中期末の土器や、有溝砥石、石器剥片が出土している。２次加工のある縦長剥片が出土したが、紛れ込みと思われる。

ＳＫ12（第10図）　調査区の西よりに位置する。平面形は長軸1.1ｍ、短軸0.8ｍの楕円形で、検出面からの深さは0.2ｍである。縄文土器小片、石器剥片が出土している。

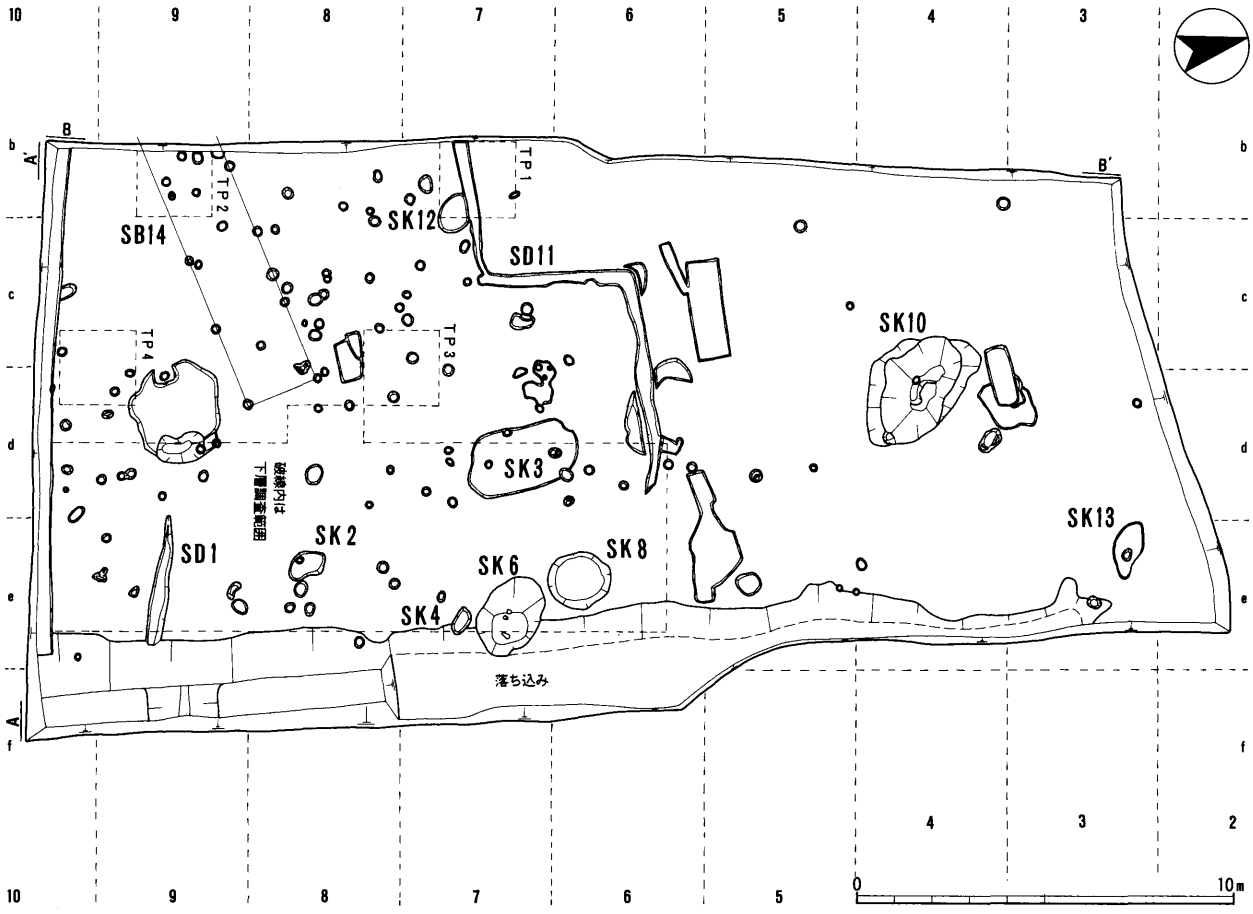
(2)中世

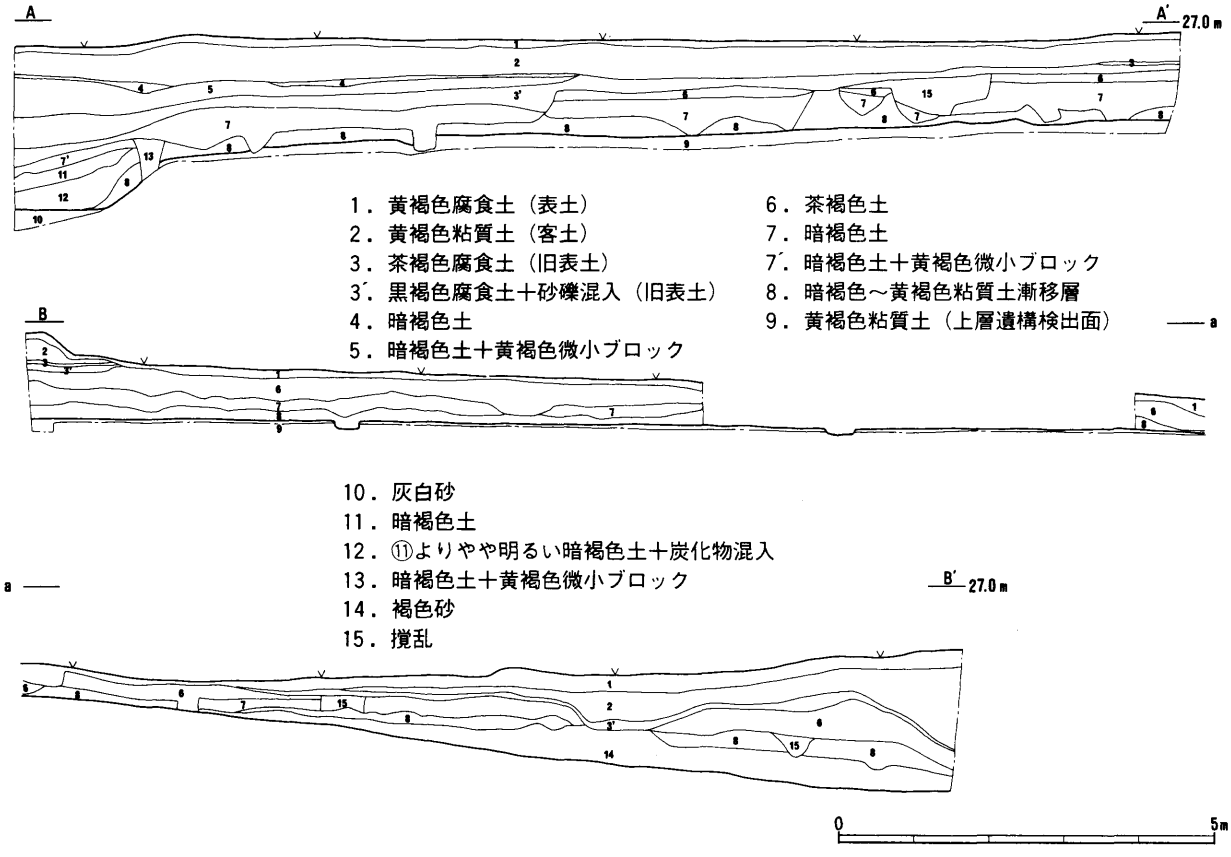
中世の遺構と思われるものは２基の土坑と、落ち込みである。落ち込みは自然地形である可能性もあるが、ここで扱うことにする。

ＳＫ２（第 10 図）　調査区の南東よりに位置する。平面形は崩れた楕円形で、長軸 1.1 ｍ、短軸 0.7 ｍ、検出面からの深さは0.2ｍである。土師器小片が出土している。

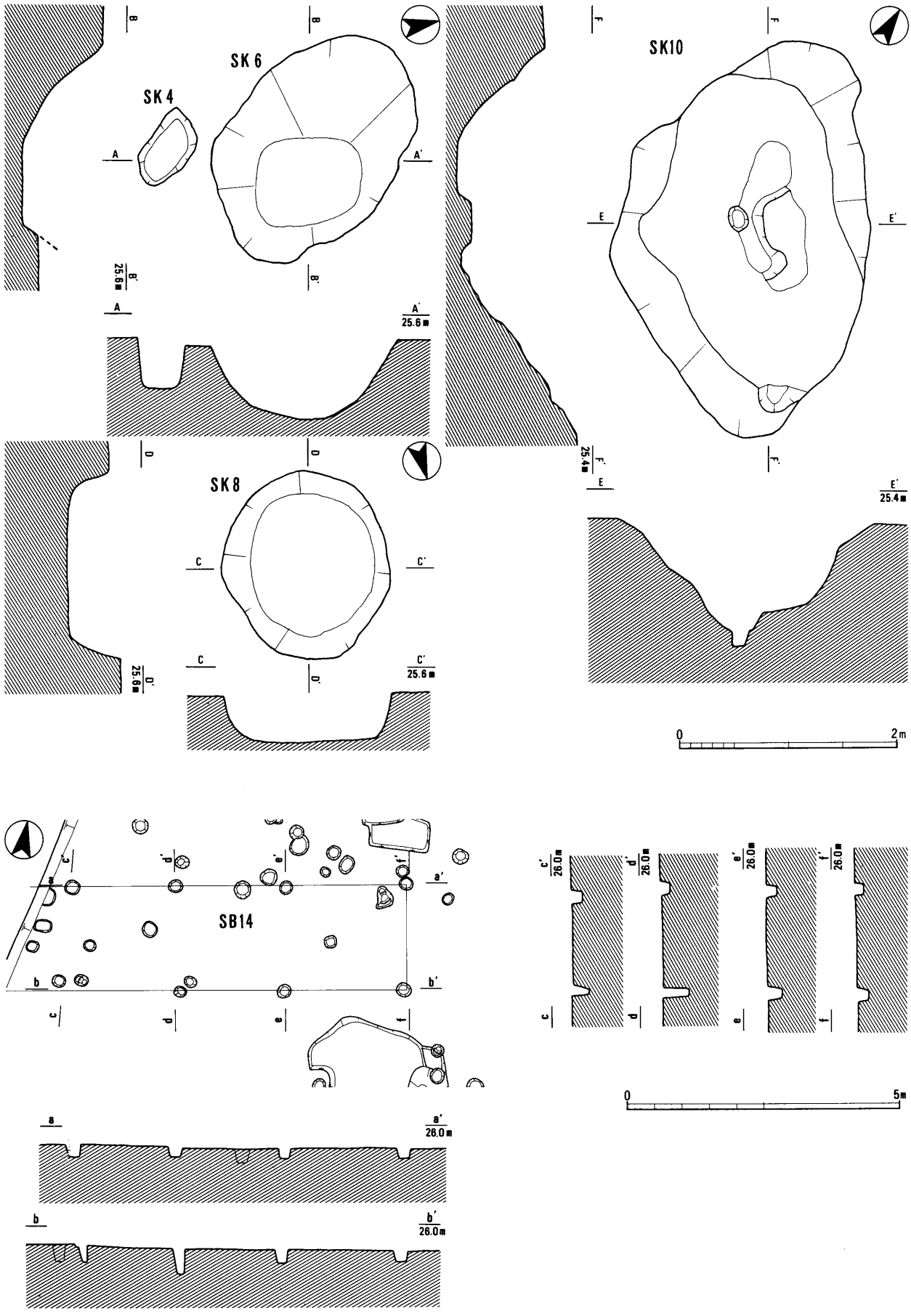
ＳＫ３（第 10 図）　調査区のほぼ中央に位置する。平面形は長軸3.0ｍ、短軸1.7ｍの楕円形で、検出面からの深さは 0.1ｍである。土師器小片が出土している。

落ち込み（第10図）　調査区の東端に沿って、全長約28m、最大幅約3ｍにわたって検出した。検出面からの深さは約１ｍである。また、底で幅1.8 ｍの溝状に落ち込む部分があったが、長さ0.8ｍで調査区外に続き、詳細は不明である。遺物は、縄文時代の石鏃、古墳時代のものと見られる甕・高杯の小片、中世の土師器・陶磁器である。遺物を見る限り、上層と下層、溝らしい遺構との間に時期差はほとんど無いように思われる。南伊勢系土師器鍋編年の２段階ｃ型式以降の遺物は見られないため、14世紀中ご





第10図　調査区平面図（1：200）及び　土層断面図（1：100）



第11図　遺構実測図（1：50）（1：100）

ろの短期間に埋まったものと考えている。

(3)時期不明の遺構

時期の不明な遺構には、掘立柱建物、土坑、溝などがある。

ＳＢ14（第11図） 調査区の南西に位置する。調査区外へのびると思われ、桁行３間以上、梁行１間の掘立柱建物と考えている。東西棟と思われ、棟方向はＮ80°Ｅである。遺物の出土が全く無く、関連すると思われる遺構も無い。柱穴の埋土は旧表土層直下の茶褐色土であり、中世以降の遺構である可能性がある。

ＳＫ13（第10図） 調査区の北東に位置する土坑である。平面形は長軸1.5ｍ、短軸0.7ｍの不定形で、検出面からの深さは0.2ｍである。遺構埋土はわずかに赤味がかった褐色である。似た埋土のピットからは石器剥片が出土しており、縄文時代の土坑である可能性もある。

ＳＤ1（第10図） 調査区の南東に位置する溝である。調査区内に始まり、落ち込み上を切って調査区外に続く。全長5.5ｍ、幅0.5ｍ、検出面からの深さは0.1ｍである。ほぼ直線で、方向はN70°Wである。切り合い関係から14世紀中ごろ以降の遺構であると考えられる。

ＳＤ11（第10図） 調査区の中央に位置し、２度の屈曲を経て調査区外に至る。ただし、遺構内の高低差はほとんど無く、どちらに流れていたかは不明である。全長14ｍ、幅0.3ｍ、検出面からの深さは0.1ｍで、方向はN90°Eである。遺物から、近世以降の遺構かとも考えられる。

4 遺物

(1)縄文時代

土器（第12図） 土坑を中心に出土したが、いずれも小片・少量のため、器形を復元することはできなかった。

16は口唇を内側にやや肥厚させる例、17は肥厚させずに収める例である。いずれも無文である。20は「３」の字状の刺突が連続している。施文原体は半裁竹管を並列させたもののように思われるが、完全なＤ字ではなく、横にしたＶ字のようにも見える。前期の羽島下層式並行のものと思われる。21には口縁部に竹管による刺突が施される。中期末の北白川Ｃ式並行のものと思われる。22～28･31はいずれも沈線による施文である。22は楕円形というよりも木葉形に近い区画文を持ち、比較的長い直線をほぼ横位に充填している。29･30は表面が磨滅しており、確認しにくいが、施文がほぼ横位に施されている。22～27･29･30は同様の胎土と焼成であり、同一個体と思われる。中期末の北白川Ｃ式並行の範疇でとらえられよう。

石器（第12図） 図示した剥片素材の石器13点の内、サヌカイトが８点、チャートが４点、頁岩が１点である。

32～41は石鏃である。32～34は側縁が直線的で基部の抉りは浅い凹基無茎鏃である。32はサヌカイト製と思われるが、かなり風化が進んでいる。ＳＫ６出土の遺物である。33は比較的丁寧な剥離が施されるが、脚部を欠損する。34は裏面に素材面を残す。35はサヌカイト製の尖基鏃である。36･37はサヌカイト製の小型の凹基無茎鏃で、似た形状を持つ。38は欠損品の先端部、39は尖基鏃の基部であろう。40･41は石鏃の未成品であると思われる。42はサヌカイトとみられる石材の尖頭器である。激しく風化しているが、有茎尖頭器の可能性がある。下層調査での出土であるが、下層石器群とは区別している。43は先端部に使用によると思われる小剥離が認められる頁岩製の剥片である。44は横長の剥片を素材としたスクレイパーである。主要剥離面側に刃部を作り出している。裏面は礫面を大きく残す。45は砂岩製の有溝砥石で、表面に２条、裏面に２条の溝が認められる。46は磨石であろう。

(2)中世（第13図）

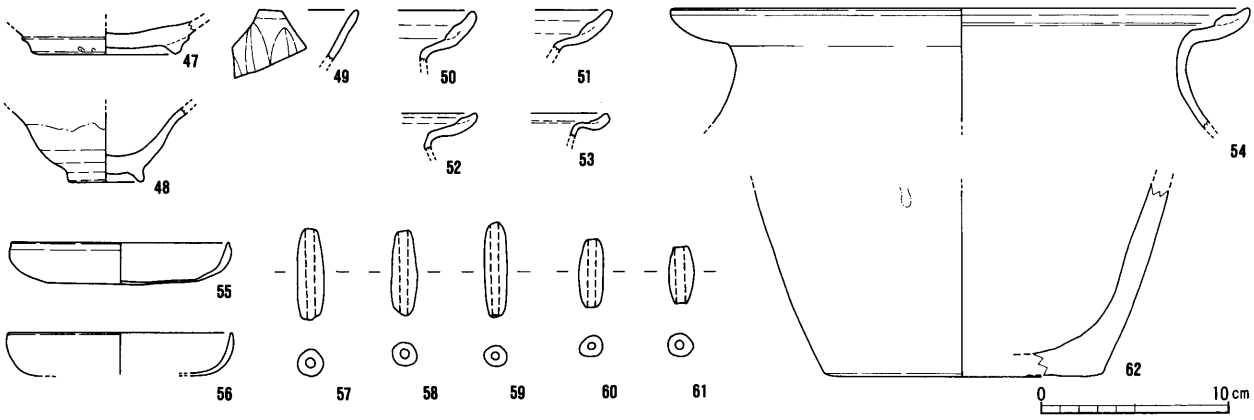
落ち込みの出土がほとんどである。実年代は13世紀から14世紀前半までのものと考えている。

土師器類 50～54の鍋は南伊勢系土師器鍋編年の2段階ｃ形式相当のもので、55･56の皿についても同時期であろう。57～61の土錘の出土も多い。

陶器 47の山茶椀は尾張産の第５形式相当のもの、48の天目茶碗は古瀬戸中Ⅱ期相当のものと思われる。62の渥美産の壺も出土している。

磁器 49は龍泉窯産のものと思われる碗の小片である。蓮弁文が認められる。

第12図　遺物実測図（1）　土器（1：3）　石器（2：3）



第13図　遺物実測図（2）（1：4）

V　結　語

本遺跡の調査では、旧石器時代の石器ブロックの検出が特筆されよう。ここでは旧石器時代に限定して記述する。

1　石器組成について

石器ブロックの石器組成は小型のナイフ形石器、両面加工の木葉形尖頭器、寸づまりの縦長剥片、不定形の剥片、不定形の石核である。この組成は、従来から知られている宮川流域の旧石器時代の遺跡にもみられる傾向である。石器ブロック外では、比して大型のナイフ形石器がある。石材や形状、それに伴う技法上でも石器ブロックとは隔たりをみせる。甲高の縦長剥片を利用したスクレイパーには器種別の剥片選択がうかがえる。

2　石材について

石器ブロックの石材はほとんどが在地のチャートを利用している。ここで使用されたチャートは良質なものではない。このことは、定形的な剥片を認めがたいことと、剥片数に対する製品の少なさの原因となっていると思われる。石器ブロック外には頁岩、砂岩利用のものが若干あるのみである。

3　剥片剥離技術について

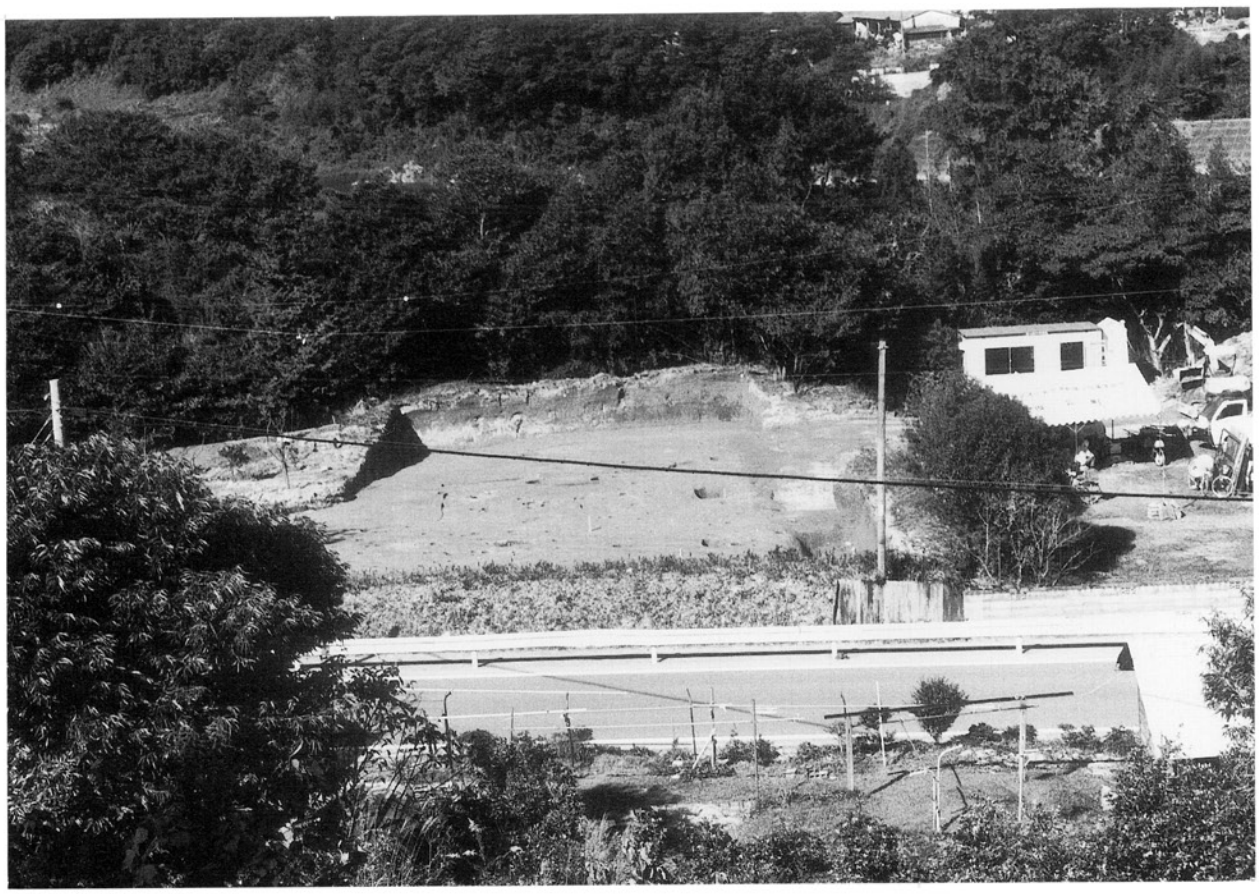
石核に打面転移を繰り返し、多方面からの剥片剥離が認められることは、粗悪な石材の中でも比較的良質な部分の剥片を獲得しようとする意図なのであろう。これは接合資料1によっても明らかになった。ただ、接合資料2で認められたように、粗悪な石材であっても縦長の剥片を連続して剥離しようとする意図がみえる例も存在する。

4　山崎遺跡の位置づけについて

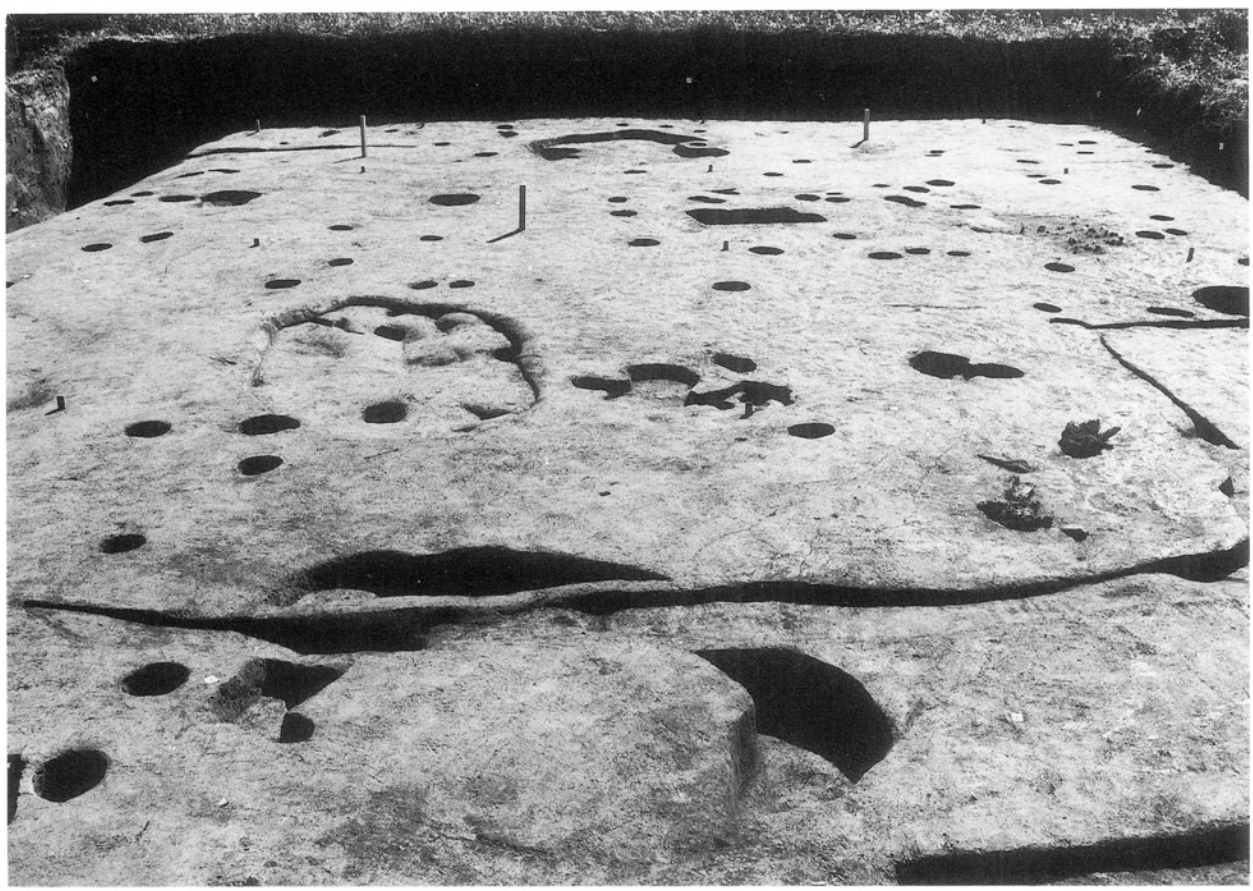
遺跡の立地や、出土遺物をみると大台町出張遺跡のような大規模な、いわば拠点的な場ではなく、移動生活中の場であるという判断ができる。粗悪な石材を場当たり的に使用している印象や、製品の極端な少なさは、それを物語っているのだろうか。

時期については、出張遺跡の小型の基部調整のナイフ形石器のあり方に共通しているようにみえ、また平坦な剥離の尖頭器も存在することから、ナイフ形石器の時期の最終末に位置づけることもできる。いずれにしても直線でわずか9㎞ほど上流の出張遺跡や他の遺跡との比較検討が課題である。

[註・参考文献]
① 伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』、考古学フォーラム編集部、1996年）。
② 『里木貝塚』（倉敷考古館、1971年）。
③ 泉拓良ほか『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ－北白川追分町縄文遺跡の調査－』（京都大学埋蔵文化財研究センター、1985年）。
④ 『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界　資料集』（瀬戸市埋蔵文化財センター、1996年）。
以上の他、奥義次「三重県の遺跡」（『日本の旧石器文化3遺跡と遺物（下）』、雄山閣、1984年）、三ツ木貞夫他『出張遺跡調査報告書』（大台町出張遺跡調査会、1979年）、竹岡俊樹『石器研究法』（言叢社、1989年）を参考にした。

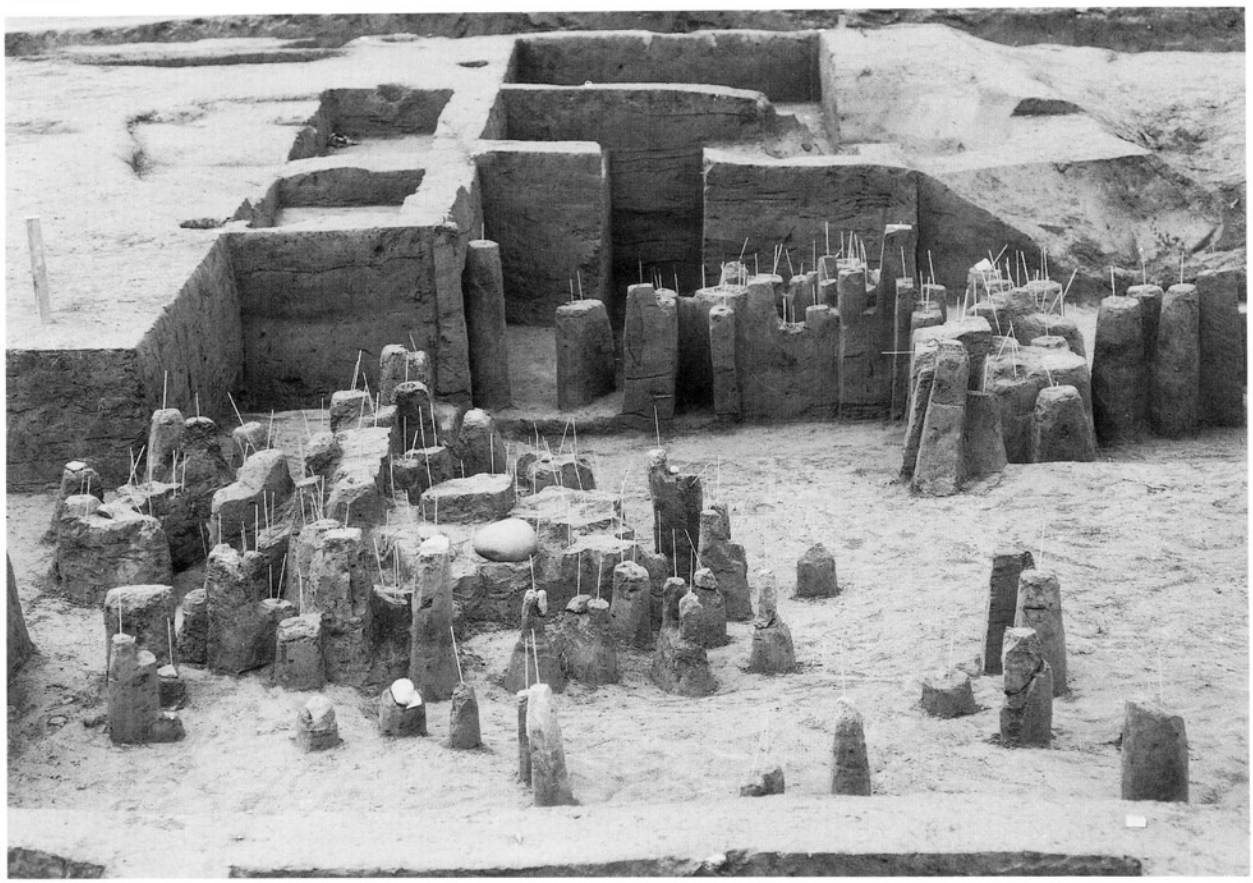


調査区遠景（南から）



上層遺構（北から）

図版 2



下層遺物出土状況（南から）

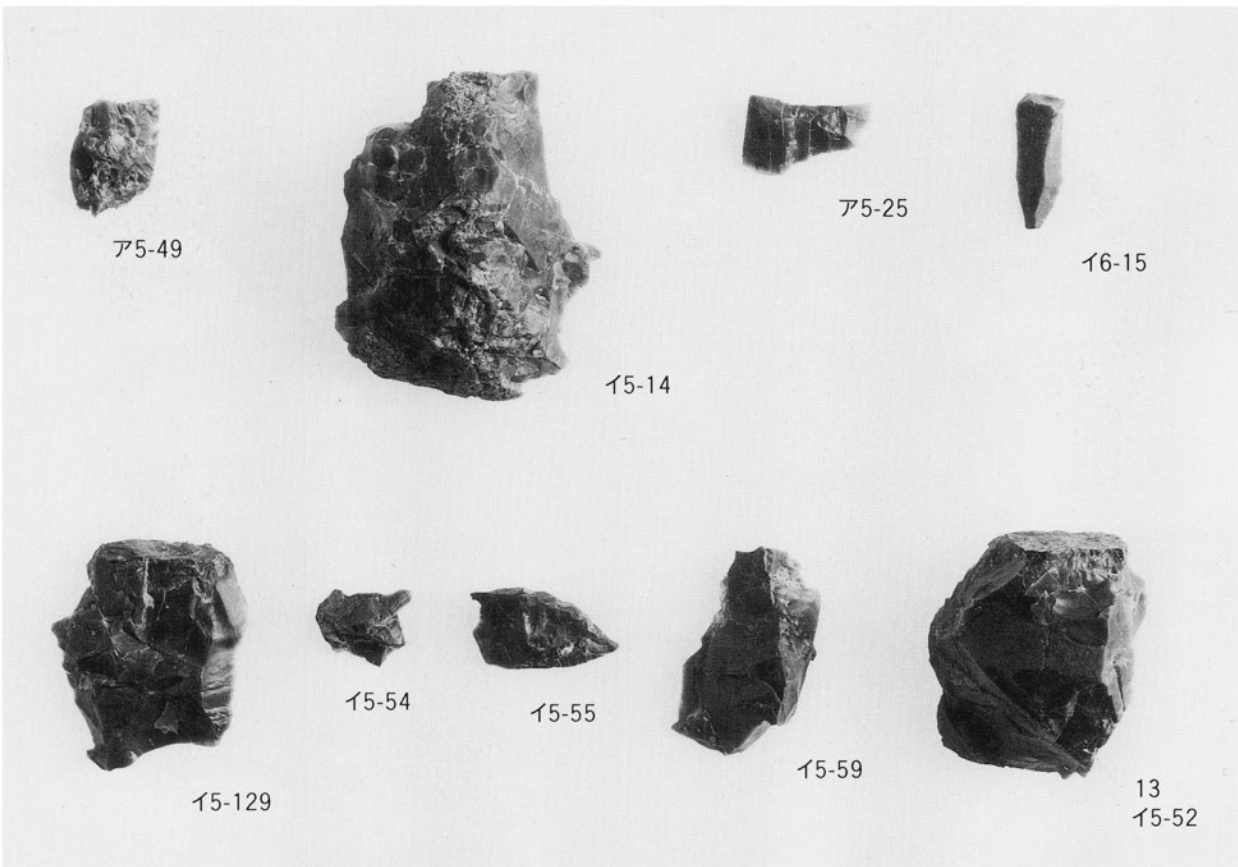
下層遺物出土状況（北東から）

下層遺物出土状況

下層調査作業風景（北から）

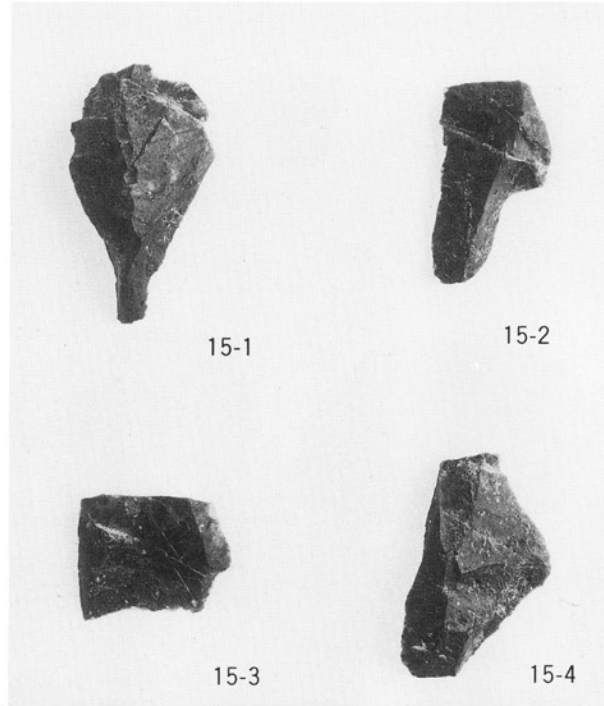
図版 4

接合資料 1

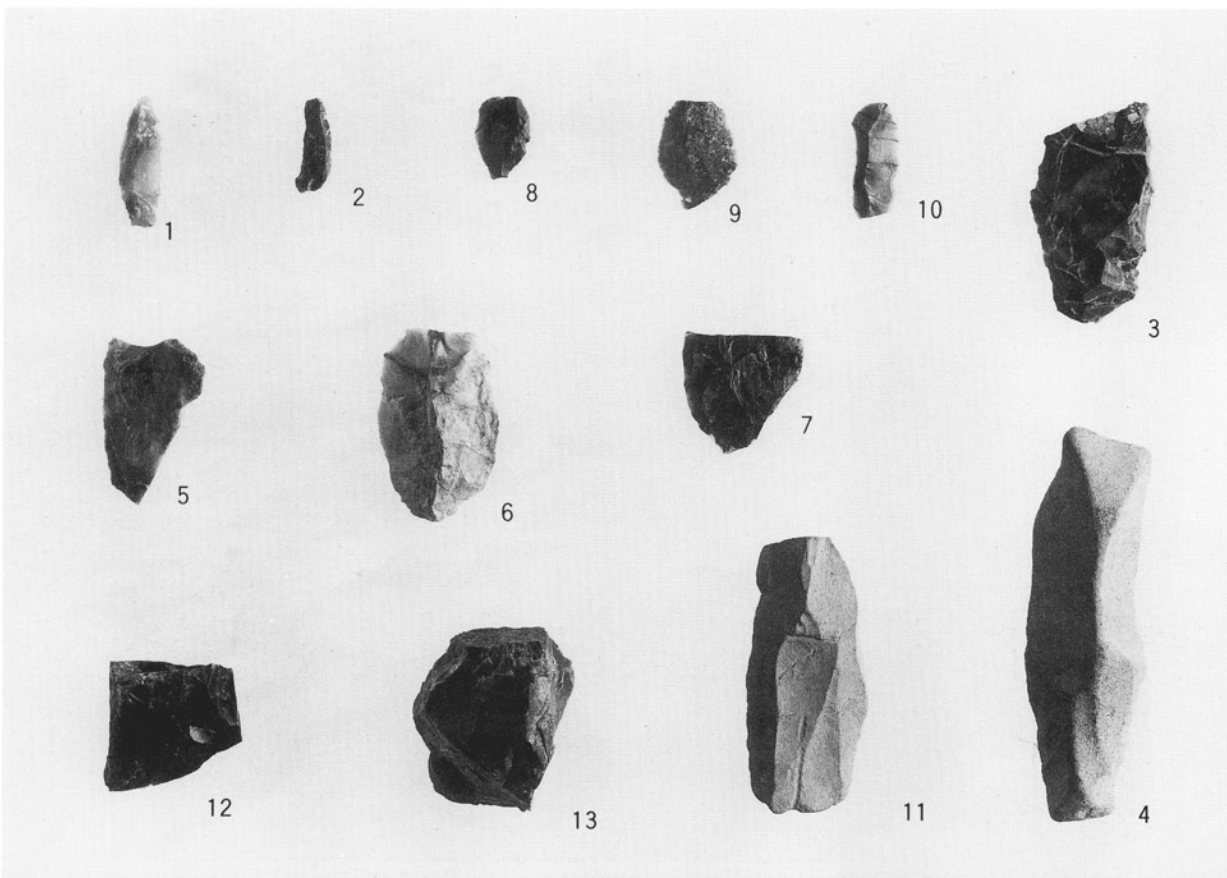


接合資料 1 （剥片・石核）

接合資料 2

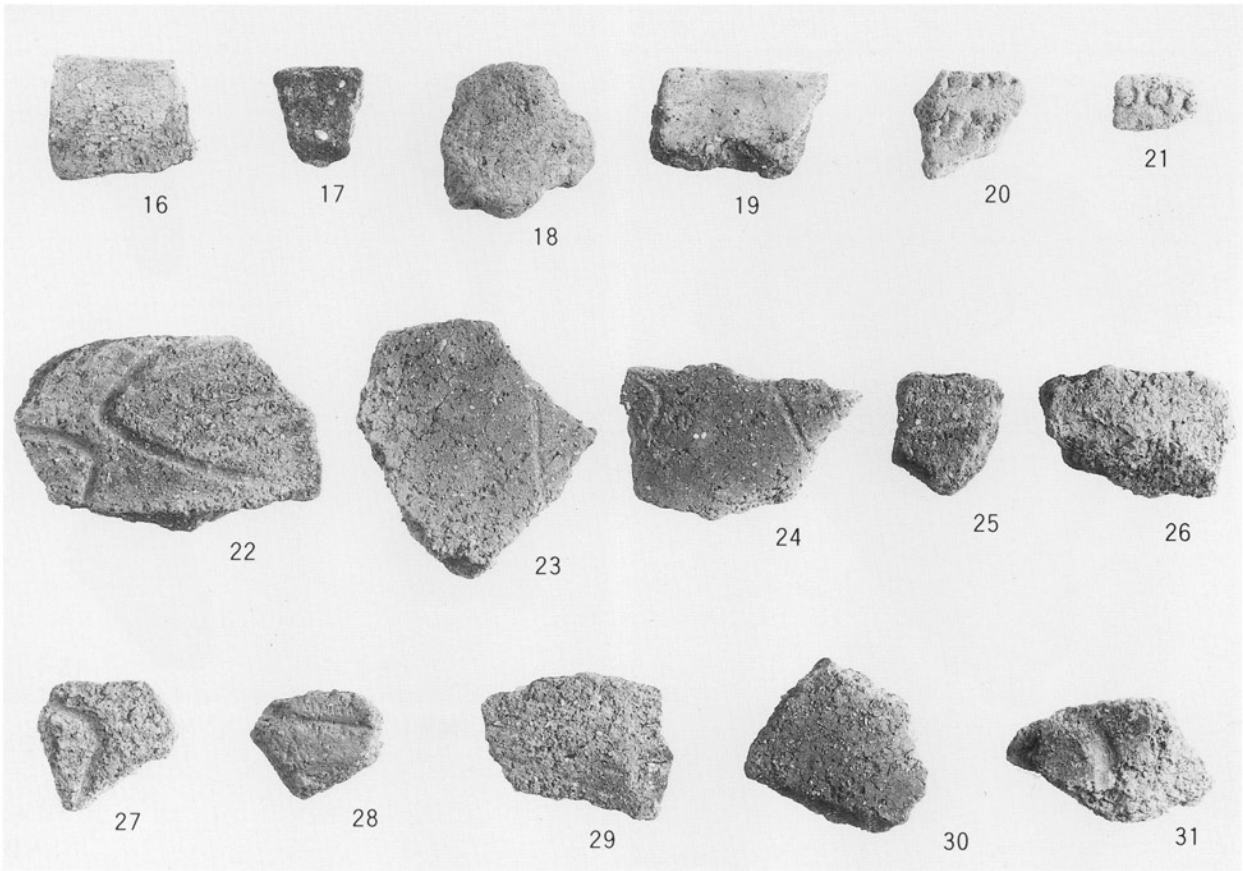


接合資料 2（剝片）

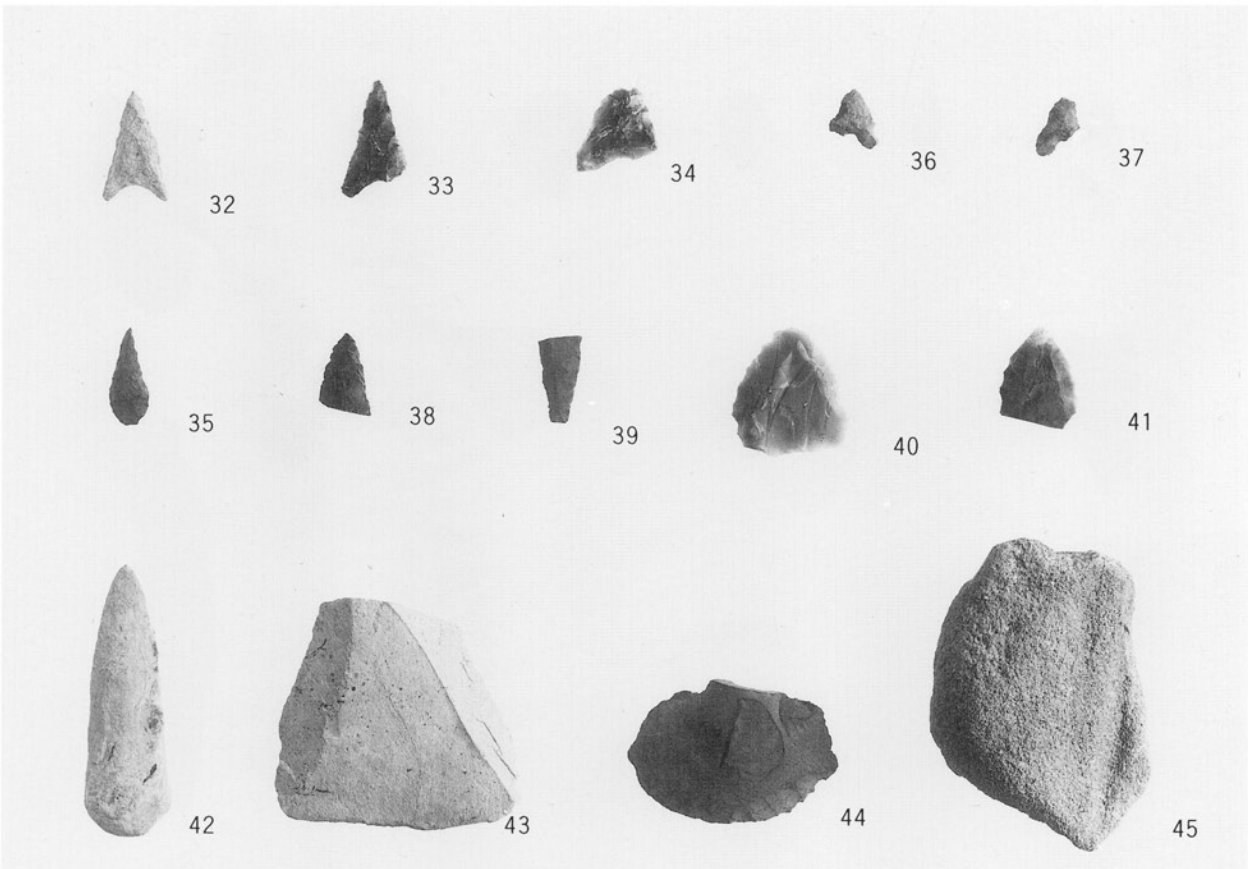


旧石器時代の遺物

図版 6



縄文時代の土器



縄文時代の石器

報告書抄録

ふりがな	やまざき いせき はっくつ ちょうさ ほうこく
書名	山崎遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	160
編著者名	松葉　和也
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－03　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 05965－2－1732
発行年月日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
やまざき いせき 山崎遺跡	みえけん わたらいぐん 三重県度会郡 わたらいちょうしも くぐ 度会町下久具	244708		34° 25′ 33″	136° 37′ 37″	19960909 ～ 19961126	600	県道度会玉城線橋梁整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山崎遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代中期 中世	石器集中部・土坑・掘立柱建物・溝	石器・縄文土器・土師器・陶磁器	

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　160

山崎遺跡発掘調査報告

1997年（平成9年）3月31日
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷者　東海印刷株式会社